あゝ沖縄 <54>

戦友の歌

故郷を遠く離れ 雨に打たれ消えてゆく

戦没一万八千五柱の英霊にささぐ

米軍は、山頂の監視口と、下るには、伝令を聞かねばならぬ。坑道内いっぱいの負傷兵を火薬のニオイとホコリで、一層の入り口の四方からこう内に友軍を加えた。せまいこう内は、負傷者でいっぱい。直撃はこう内につまった負傷兵の口から口への伝達、大勢の負傷兵が傷の痛さにうめく、下の入り口へのぼるには、伝令がよく聞きとれない。状況を判断するのに、下の入り口へ、第六つ付で何度も上の監視口へ力へかけのぼり、下の入り口付近へ達した。坑道内は暗と熱で息苦しく、死にものの狂いだった。

午後三時すぎ、米軍は、馬の口からは火炎放射のうなりがとどろく、田中曹長は、伝令がよく聞きとれない。状況を判断すれば、平野大隊長以下将兵は、一時にして吹きとび、大隊の任務も終わるだろう。どうせ死ぬなら、ひと風いに死ねばいい—田中曹長は、あまりの苦しさに、ひとりごとをいった。

敵が遠方にいる場合は、その状況を知ろうとし、判断もできた。また、夜間陣地の動向もわかった。だが、終日、敵の攻撃に耐えてきた人員なりご中心に、飛行場大隊、船舶工兵なりて編成をしなおし、つぎの任務についた。

補充された兵は、全員を孤の

沖縄戦士たちの面

5月25日 飛行、通信部隊攻撃米軍に攻入。

戦没以来の歩兵第二十二連隊の二連隊の指揮下に戻った。奇地部落に近い二四〇高地に後退し戦闘可能な負傷兵、看護兵に頭

地獄開始

る機関銃掃射に

部落

沖縄

七師団戦記

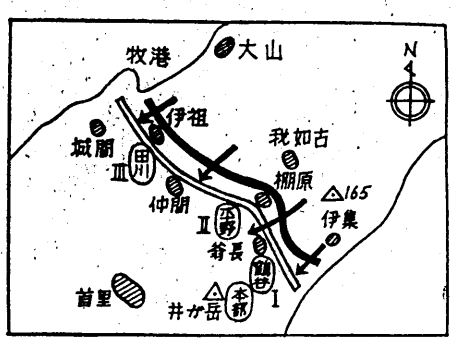
あゝ沖縄

<55>

戦没一万八十五柱の英霊にささぐ

米軍の第一次総攻撃

四月十六日、にわかに米軍の攻撃、爆撃がはげしくなった。いままでにない猛烈さだ！と日本側は記録している。米軍の第一次総攻撃開始はこの日午前六時四十分、日本軍の敵後方防御線を一挙に撃破する意図のもとに行なわれた。米軍兵二十七個大隊は、大砲三百二十門の援護をしき、海上からは巡洋艦六、戦艦六、駆逐艦六が各間を埋め、四千分間で一万九千発の砲撃が首里の日本軍陣地に浴びせられた。さらに、爆撃機六百五十機は日本軍第一線に爆弾の雨を降らせた。



沖縄戦さなかの国

五月26日

二十二日以来、激雨は屋根から二時間方向に降下中

四月十九日ごろの歩兵二十二連隊の配置。黒線は米軍、白線は日本軍。米軍前線から首里まで約四㌔。

空からドラムかんが投下され、車両隊が無中してサク裂、陣地は一つ、また一つとふさがれて日本軍第一線は火の海になる。一陣地に五、六十発の巨軍・迫ゆく。日本軍の左翼陣地（西海岸）の西表陣地は、遠く海上にたたこもって防戦。防衛隊四民転じて逃げてゆく。付近の部隊の弾薬庫は、遠く海上に突撃された。日本軍は、次々にとこもり、爆撃、爆撃をさけているだけ。いかんともしがたい。米軍は、東海岸の浦添

四昼夜の攻防戦

山兵団も最前線へ

海岸の丘を攻める米軍＝米陸軍海軍共同写真提供＝

我如古をへて、聚落にいたる西約六㌔の戦線に、約一万の兵力をくり出し、日本軍陣地を突破しようと、猛攻撃開始。

石兵団各部隊は、山兵団の歩兵第二十二連隊とともに、陣地

の四十五㌔戦出張でねばり強くはげしい攻撃は四昼夜つづけられ、たちまち四、五名が火をふき後退された。残りの戦車が、米軍は攻撃を中止した。日

本軍参謀部は、米軍上陸以来敵の石員（東部岸・南地区南東の地区）に配備することを決め、山兵団各部隊に移動を命じた。

山兵団の部隊は、元気いっぱい前進第一線（出発、二十四日から二十七日までのあいだに移動を完了した。日本軍は戦線を、（東部岸から）我如古・棚原・仲間・宜野湾・勢理客の線にとどめた。

山三四七四部隊本部出発期死者（今井俊さんの調査）

▽中隊　大浦真治（第六中隊（五月二日真壁、小禄）大浦勝夫（五月十日糸満、小禄）大浦勝夫（五月十日糸満、小禄）沖縄市南六四十三）小嶺政軍（糸満郡中隊長、五月十日西原村字五十嵐地、北谷村字浦崎）佐藤長太郎（第二連隊中隊長、五月十九日南風原村字兼城、北谷村字浦崎）佐藤長太郎（第二連隊中隊長、五月十九日南風原村字兼城、北谷村字浦崎）松島良一（第二連隊本部北谷村字浦崎）佐藤長太郎（第二連隊本部付、六月十九日真壁、北谷村字浦崎）川島七男（第三中隊町八六）川島七男（第三中隊長、五月五日南風原村字兼城、北谷村字浦崎）加藤一也（六月二十日三和村字兼城、白老町）五十嵐英雄（連隊本部、四月二十九日糸満、南風原）佐藤廷二（第五中隊、五月十日糸満、南風原）

▽曹長　本平義信（第二中隊、六月十日、南風原村字兼城、小禄平地）加藤一也（六月二十日三和村字兼城、白老町）

▽少尉　東大吉（第三大隊第小隊長、五月十九日弁ガ岳、札幌市川二八一四）野多栄治（連隊本部、十九年十月四日北谷村字浦崎日町）大谷仁三郎（第十中隊、四月十二日浦添村、函館松島町）神田秀一（六月二十三日真壁、函館天神町）木村博（五月一日糸満、函館大森町）

▽軍曹　本平義信（第二中隊、六月十日、南風原）

▽曹長　本平義信（第二中隊、六月十日、南風原村字兼城、小禄平地）加藤一也（六月二十日三和村字兼城、白老町）五十嵐英雄（連隊本部、四月二十九日糸満、南風原）佐藤廷二（第五中隊、五月十日糸満、南風原）

▽軍曹　本平義信（第二中隊、六月十日、南風原村字兼城、小禄平地）加藤一也（六月二十日三和村字兼城、白老町）五十嵐英雄（連隊本部、四月二十九日糸満、南風原）佐藤廷二（第五中隊、五月十日糸満、南風原）

▽軍曹　本平義信（第二中隊、六月十日、南風原村字兼城、小禄平地）加藤一也（六月二十日三和村字兼城、白老町

七師団戦記

あゝ沖縄 <56>

戦没一万八十五柱の英霊にささぐ

たらちねの手紙 (1)

この顔、あの姿 いまはいずこの野や海に

この戦記は、はるか南海の島に果て勇者のための鎮魂歌である。本道出身二万有余の魂にささげる永遠の記録である。したがって反響は大きく、読者、遺族からの手紙が記者の机上に山積している。そのなかから三回にわたって"親の声"をお伝えしよう。

（編集部長野宇吉別一六〇、

岩坂ミサヨさんの手紙。

突然、こんなお便り、ご多忙中、申し訳ございません。なぜか、わたくし自身、じっとしておられない想いで。悪夢を見ているように胸をしめつけられて、どうしても、だれかにおうってしまいました。

何カ月間も見なかったお写真を出してながめているうちに、わたくしが、こうして生まれて現在の生活に安心しておられるのが、申し訳ないようで、たまらなくなってきました。

戦時中、遺族の兵士のかたがたとうつしたお写真の一枚、一枚、この方も、あの方も、こうして、ご一緒にいらっしゃいます。

親や妻子のそばから離れ、みなさんが、戦争という命をかけての仕活にでてゆかれ、いまは、どこの野山か、それとも海のはてか…。訪れようもない遠いところへ消えて行ってしまわれました。

残された家族の方の悲しみを知らず、かえら幽霊りについておられる、この一人一人のお顔一自分のつとめ、責任、生きて帰るのぞみがないことを知りながら、そのお心をかくすというより、あきらめ切って、静かな記録になるものもございませんが、沖縄よりたまにたよりがありました。（ハガキ四、五枚手持ちしており、忘れ形見としてこの方、あの方、一枚、一枚、ていねいに、ていねいにおなぞらえしてご覧ください。

（略）

苦小牧市末広町二四ノ一八、木戸喜八さん（父）の手紙。

このたびは、北海タイムス紙上に沖縄戦記おしらせくださいまして、まことにありがとうございます。忘れることのできない戦争の思いを、手にとるように見せていただき、実にうれしく、戦場に倒れし兵士二同は浮かばれます。さまざまに日々、拝見させていただいております。厚くお礼申しあげます。

（略）

毎日お待ち申しく、繰り返し読ませていただいております。

（略）

夕張市平和一番地一四四号、三部隊佐藤隊（以下略）

新たな親にくれております。主人は本籍、夕張市幌内九十一番地、陸軍曹長佐藤正治、山三四八三部隊佐藤隊（以下略）

小樽市緑町三ノ一、小沢キツエさん（妻）の手紙。

前略、貴紙夕刊の「あゝ沖縄」を拝読させていただいておりますが、無責任でございます。戦没者のアルバムを作成なさい。

（前略）小生の弟は第七師団に入営後、沖縄にて一同の通信が最後でした。現地では、記事以上の悲惨なことと思います。弟も若くしてお国のために散りました。写真はありませんので、どの写真を送ります。

（略）（いずれも原文のまま）

厚岸郡浜中町舞多布、新谷晃さん（知人）の手紙。

拝啓、貴紙上四月一日よりの七師団戦記「あゝ沖縄」拝読、切り取って保存することに致し

加藤キツさん（妻）の手紙。

このたび、北海タイムス社の戦記「あゝ沖縄」を毎日拝読して、なくなった主人のご苦労がしのばれ、胸いっぱいになって

我々家は内地の医師なのでしょうか。当時いろいろ問い合わせてみましたが、全然消息がわかりませんでした。我部一六一六師団（は）陸軍大尉小沢清一

北霊神で例年慰霊祭をしている沖縄の島仲タツ子さん（和服の人）と宮平ミツさん（洋服の人）

の遺族（略）

札幌市南十八西七、矢倉アパート内、工藤キノさん（母）の手紙。

七師団戦記「あゝ沖縄」を毎日拝見させていただき、いまさらながら当時の沖縄をしのび、涙をあらたにいたしております。

また、このたびは沖縄戦没者アルバムを作成してくださるとのことですが、なかなか大変なことと感謝いたしております。

子孫後生も、戦争のなかにうえていただければさいわいと思い、左記のとおり書きましたから、よろしくお願い致します。なお写真は、中尉のが見あたりませんので、これを同封いたします。

（略）

当部部初山別村字有明、岩塩芳雄さん（父）の手紙。

（前略）

（略）

厚岸郡厚岸町字別一六〇、

沖縄戦亡ゆかりの間

米軍、中飛行場を強襲して、再び使用。

那覇八号作戦（六十機）米艦沈没二、潜艦七。

5月27日

あゝ沖縄 <57>

戦没一万八十五柱の英霊にささぐ

思い出に感涙……

夫、愛児、兄弟をしのび

たらちねの手紙

沖縄戦亡とうの国
5月28日
日本軍司令部
最期のなみなみ首
里を放棄、南部
へさがる。

七師団戦記

札幌市北十条五、国鉄アパート二二号一〇六室、鈴木美代子さんの手紙

前略 乱文にて、とりいそぎおたより申しあげます。お許しください。

私は、北海タイムス全紙を読ませていただいております。いつもありがたくお礼申しあげます。

おっそくですが、夕刊に連日のっております「あゝ沖縄」。何をおいても一番先に読むのが日課になっております。

と申しますのは、私のたった一人の弟の主人が、沖縄で戦死したからです。すぐ手元へとどかしてしあげます。さっそく、仏前に新聞とお線香を供え、苦しんで死んでゆった兄のめい福を祈りました。

そのたびごとに、すこしでも戦没者の霊をお慰めできればと、遺族公のために努力いたしております。

戦没者の写真アルバムを作成くださいますとのこと、夫の写真を同封いたしましたのでお願い致します。山三四七四部隊佐藤球、故小倉与吉吉雄岡。

札幌市平岸三条四丁目、三浦真一方横沢タノさんの手紙 乱筆にてお許しくださいませ。タイムスの沖縄戦記を毎日楽しみに読んでいます。先ごろ、●デパートで、沖縄戦の写真を見せていただきました。

いろいろと感銘ふかいお写真が見まして、いまさらながら激しい戦いのようすを思い、目がしらがあつくなり、拝いて帰りました。

あれから、もう二十年の長い歳月がたったのですが、毎日のように主人のことを思い出しているのです。幼かった子供たちも、それぞれに成長して、元気に生活しております。

●さんの会場で写真をくい入るように見ておられる年とったおじいさんや中年のご婦人がたみなさん大部分子供さんやご主人をなくされた、私の同じ思い

私の願いは、死ぬまでに一度

摩文仁の丘には、毎日のように全国からの遺族者がおとずれている。

赤平市手赤平東町二六六番地 矢一

小倉陽子さんの手紙 四月一日からの「あゝ沖縄」を拝読いたしております。生存者のみなさまより、当時のおいたわしい激戦のありさまをお知らせくださいまして、思い出もあらたにいたしております。私同様、最愛の夫、いとしい愛児、あるいは兄弟のあり日のおもかげをしのび、感涙にむせんでおられる方も大勢いらっしゃいます。

なお、遺族名簿を作成するそうですが、現在、弟は硫黄ヶ島で勇払郡追分町遺族住宅に暮らしております。兄が戦死したあと、すうっと、追分町鉄道弘済会に勤めさせていただいております。

では、乱文にて失礼ですが、まずはお礼かたがた、お知らせまで一筆しただけました。

郷土のご発展と多幸をお祈りしております。私もこれをご縁に、長く愛読させていただきます。

赤平市手赤平東町二六六番地 矢一

小倉陽子さんの手紙 四月一日からの「あゝ沖縄」を拝読いたしております。生存者のみなさまより、当時のおいたわしい激戦のありさまをお知らせくださいまして、思い出もあらたにいたしております。私同様、最愛の夫、いとしい愛児、あるいは兄弟のあり日のおもかげをしのび、感涙にむせんでおられる方も大勢いらっしゃいます。

なお、遺族名簿を作成するそうですが、現在、弟は硫黄ヶ島で勇払郡追分町遺族住宅に暮らしております。兄が戦死したあと、すうっと、追分町鉄道弘済会に勤めさせていただいております。

では、乱文にて失礼ですが、まずはお礼かたがた、お知らせまで一筆しただけました。

郷土のご発展と多幸をお祈りしております。私もこれをご縁に、長く愛読させていただきます。

ぜいいることと存じ、つつしんで、戦没者の霊に感謝の祈りをささげます。

生存者のみなさまには、激戦をじかに体験し、九死に一生を得てお帰りなされ、心からご苦労さまとお礼申しあげます。

このような悲しい戦いは、二度とくりかえしたくないと思います。銃後にあっても、みなさまが、苦しい思いをなされましたのですから。

私も、夫の霊をおなぐさめいたす

そうに見ておられる年とったおじいさんや中年のご婦人がたみなさん大部分子供さんやご主人をなくされた、私の同じ思い

私の願いは、死ぬまでに一度

全紙とのことでした。ほんとうに一度に六通の手紙がきたので私たちは大喜びしたのですが、それが縁となりましてありがたく思っております。

私の主人が戦死したと思われる遺骨は、六月の十九日に

いまだに保存してございます。いつも出しては読み、封筒などは、もう、やぶれてなくなってしまいました。

いまこうして、新聞で現地のようすを知ることができまして、私たち、どんなに喜んでいることか、どうぞ、お続けくださいませ。ほんとうに心からお礼申しあげます。

同封の写真は沖縄からのたくさんのなかに同封してあった、数すくない写真の一枚を引きのばしたものでございます。戦没者アルバムにかえていただければ、さいわいと存じます。ほんとうにありがとうございます。

しんと

主人の沖縄からのたよりは、

主人戦死の地に行ってみたい

主人の沖縄からのたよりは、

主人の沖縄からのたよりは、

主人の沖縄からのたよりは、

七師団戦記

あゝ沖縄 <58>

戦没一万八千五百柱の英霊にささぐ

たらちねの手紙

せめて遺品を…

知りたい最期の模様

沖縄戦だより

6月29日

札幌市北十二西一、荒谷さみさんの手紙。

（3）拝啓　取文お許し（原）下さいませ。御紙（は）夕刊の「あゝ沖縄」はわが子が、沖縄で戦死した由報として、毎日、夕刊を待ちわびもしやわが子の名前が出てこないか、どうかあらわれますように、と念じながら感謝にくい入るように拝見いたしております。

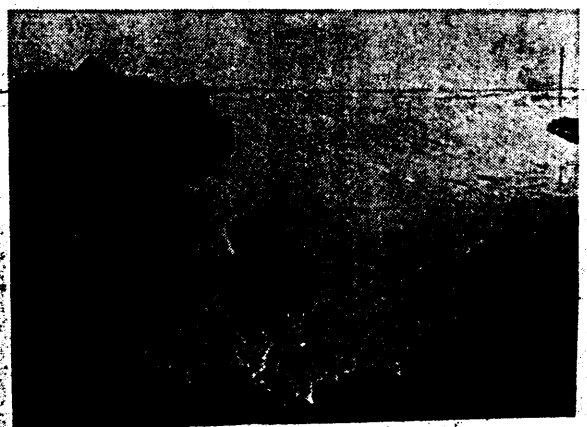
私の長男は昭和廿年三月末、名古屋の第一補充兵部隊に入隊いたしました。その後すぐ、満州第七九五部隊陸軍（兵）曹、それから伝令（兵）曹、次は西沢隊（き）に所属し、その後、沖縄に移動して戦死したとのことです。

長男は、一年後になってもわかりませんでしたので、鉄道連絡局に問いあわせましたところ「二十年八月十五日死亡」と言いたかたちだけの遺骨が、四男の分も兄弟一緒に帰ってきました。

その後十年たった三十年一月十七日、涼れもしないこの日の明方、不思議な夢を見ました。

その日のひるまえ、近所の北事の御発表があり、拝見させていただいております。どんなに感謝いたしております。つたない歌ですが、当時の気持ちをよんだものが（きい）ますのでよりうつしえの日は、かがやきて

（八尺・略）



ただ次の言だけの遺文仁の例

札幌市北十二西一、荒谷さみさんの手紙。

（3）拝啓　取文お許し（原）下さいませ。御紙（は）夕刊の「あゝ沖縄」はわが子が、沖縄で戦死した由報として、毎日、夕刊を待ちわびもしやわが子の名前が出てこないか、どうかあらわれますように、と念じながら感謝にくい入るように拝見いたしております。

私の長男は昭和廿年三月末、名古屋の第一補充兵部隊に入隊いたしました。その後すぐ、満州第七九五部隊陸軍（兵）曹、それから伝令（兵）曹、次は西沢隊（き）に所属し、その後、沖縄に移動して戦死したとのことです。

長男は、一年後になってもわかりませんでしたので、鉄道連絡局に問いあわせましたところ「二十年八月十五日死亡」と言いたかたちだけの遺骨が、四男の分も兄弟一緒に帰ってきました。

その後十年たった三十年一月十七日、涼れもしないこの日の明方、不思議な夢を見ました。

その日のひるまえ、近所の北事の御発表があり、拝見させていただいております。どんなに感謝いたしております。つたない歌ですが、当時の気持ちをよんだものが（きい）ますのでよりうつしえの日は、かがやきて

（八尺・略）

ただ次の言だけの遺文仁の例

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七師団戦記

あゝ沖縄

<59>

戦没一万八千五柱の英霊にささぐ

信頼する避難民

山兵団に手を合わす

志村大隊出動

沖縄戦史より

6月30日

雀、雲間を縫入

四月二十日、「命令、山五戦う時がきた。無理、がんばれ。」と言明であった。

七五、志村大隊は、今夕八時、首里方面へ向かって転進すべし」

敵軍山城陣地に足止められていた第四師団三十二軍司令部、天幕（野戦病院）に出動命令がくだった。第一兵団小隊の出発準備完了（第一中隊内）、駐屯地（一日）は、小隊長自信に人中隊のもとへ走った。

午後八時から、西原村方面に、大きな音、砲撃隊が進入、石兵隊が展開している上の情勢が、はいり、第一線出撃が近いそうなるそしていやとそうであった。

「よしわかった、いよいよ、第一線へ流れていってください」

「第一線の敵をやっつけ、すぐ、戻ってくる。ちょっと待っていてください」と位を置の大佐、兵隊を編隊しで出発、田兵隊、編隊者をなぐさめていた。

夕暮れとともに、志村大隊は、編隊を組んだ。本部はじめ第五中隊、第七中隊、機関銃隊を、たのんでいる。小隊長は当惑顔、兵隊は、石垣の引火でゲキ、小隊は、石垣の引火でゲキ、やはり第八の編隊を編成させ、第出撃準備。さあ、やるぞと張り切っている。

午後八時、集結を終え、大隊本部から出発を開始した。無線兵長は伝令として本部に同行した。住みなれた山城陣地をあとに、部隊は、黙々と前進する。無線隊が、車上をうなって続けさまに飛ぶ。

米軍部落をすぎ、真栄村につく、時どき、敵の照明弾があがる。あたりが明るくなり、爆弾が身近でサク裂する。米軍は、志村大隊の前進を気づいたように、

第一日的地、山川部落に到着。負傷兵が首里方面からどんどん後送されてくる。本部小銃隊、機関銃中隊は、部落前方のこうにはいり、歩兵隊小隊は道路の掘り割り伝近のこうには身長に爆弾が命中、一物も残さず消えた。

無線伝令は、本部と小隊間の連絡についた。照明弾が、ひっきりなしにあがる。敵軍が銃撃

敵の爆弾が、アブのようなうなりをたてて飛ぶ。避難民数百人が一団となってやってきた。老人たちが立ち止まった。前進する部隊に手をあわせ、しきりにおがんでいる。

「山部隊の兵隊さんが、第一線へ行ってくれると、この戦争は勝てる」

といっている。山兵団はこんなに信頼されているのか—みんな、まさまさ張り切った。

敵の爆弾が、ひゅうひゅうと、空を切って、ものすごい音を立てて、ものすごい音を立てて、ものすごい音を立てて

七個国戦記

あゝ沖縄

<60>

戦没一万八十五柱の英霊にささぐ

三人の伝令兵

息をのむ数分

不発弾、二度目の命拾い

[illegible]

[illegible]

[illegible]

沖縄

七師団戦記

戦没一万八十五柱の英霊にささぐ

女学生たち

爆撃も無関心

一途に負傷兵を後送

沖縄戦さまざまの間

6月1日

米軍、南下開始

こんなに空襲をあびているのでは、とても安心して寝ることはいってゆけない。看護婦たちは、そう感った。

ふとふと見ていると、向こうの方で足の動かなくなった、幸十名の看護婦の通路に、夜の時間だけ出されている。軍んでいるのは、沖縄の女生たちだ。モンペ姿に白バンダ、防毒マスク、もいっぱい開化といった様子で、一途に負傷兵を後送している。この光景を見ているうちに、女学生たちも、ずいぶんたくましくなってきた。わたし、われわれ

「どこから行くの」

軍隊が知恵になる三人は、ちょっとゆけない。看護婦たちは、そう感った。

「ふとふと見ていると、向こうの方で足の動かなくなった、幸十名の看護婦の通路に、夜の時間だけ出されている。軍んでいるのは、沖縄の女生たちだ。モンペ姿に白バンダ、防毒マスク、もいっぱい開化といった様子で、一途に負傷兵を後送している。この光景を見ているうちに、女学生たちも、ずいぶんたくましくなってきた。わたし、われわ

七師団戦記

あゝ沖縄 <62>

戦没二万八十五柱の英霊にささぐ

立木も棒と化す

隊列に敵弾が落下

工藤中隊

山岡七郎医師第一大隊（長・伊藤栄一大尉）第三中隊（長・工藤中隊）の行動を、第二小隊（長・伊藤少尉）、第一分隊（長・中島三郎伍長）佐藤武夫上等兵（前線市岡大通六ノ二二）と第三小隊（長・高橋栄一准尉）第四分隊（長・中山栄松伍長・前線市岡一四九、仲通り北尚巷）の手記によってつづる

第三中隊は馬乗嶺城（糸満町東北約一㌔）の陣地についていた。四月二十二日夜、前線へ出発した。

ヤミをさく敵弾のサク裂、続いて、敵襲がすごい。遂に、宮城から一百数十名の大部落で隊列のなかに敵弾が落下した。装具の重さは約二十五㌔。行軍中は再び、

七師団戦記

あゝ沖縄

<63>

戦没一万八千五柱の英霊にささぐ

工藤中隊

うなり、叫ぶ負傷兵

戦友も日一日と減る

「荷物小隊長は中山伍長の順をじいっとのぞきこみ「中山、分隊長をやれば死ぬぞ、覚悟はいいか？」

と言ふおす。死は好むところではないが、決心はしている。伍長は、無言でうなずいた。

「まあ、みなみな死ぬというわけではないから大じょうぶだ！」

高野特務曹は、第四分隊に出発をうながした。

中山分隊長は後輪を指揮し、ヤミのなかを我が小学校前の台地（金城）に進出、一人の被害もなく、目的地についた。台地から自分をこしらえて敵状を見ると敵は、一個分隊くらいで陣地できる態勢ではない。

（こちらはナキ弾倉が三百一こんな貧弱な兵器では、とうにもならん）あっさり判断した。

〈忍びついているのかな？〉

分隊長は自問し、そして自答した。

〈必ずばかりが国のためではないだろう。部下に命があってのものダネだ〉

「攻撃はやめた。現在地で敵状を偵察する」

部下に指示を与えた。ぐあいのよく、近くに沖縄の墓所がある。墓の部下をかくし、入り口を偽装して四月二十八日の夜をすごした。

四月二十九日、米軍の進攻がない。そのまま、じっとタガになるのを待った。

〈今晩十一時ごろになれば、中隊から連絡がくる。その時、さがればいい〉

そう考え、部下にも行けて不安を一掃した。

十一時ごろ、第三小隊から佐々木高雄軍曹（谷井江町）が兵一人をつれ、撤退命令を伝達にきた。中山分隊は小隊へ戻った。

〈二十九日の総攻撃も延期になった。戦う時は、これからいくらでもある〉

中山伍長は、そう、自分にいきかせた。

四月三十日夜、第三中隊は、五月四日と決められた総攻撃準備のため、陣地換を命ぜられた。午後九時、重い装具を背負い、大名を出発、弁ガ岳をのぼり宜里を通りぬけ、五月一日の夜明け方、宜里北方の平良部落に到着した。

すでに中隊主力は、一四六高地（宜里北方約二キロ、勝山高地ともいう）下の配置についていた。

（以上は、中山繁伍長の手記によったものだが、同じ中隊の第二小隊（長・伊藤少尉）部

× × × ×

外では、照明弾がキラキラ輝いている。丘上からの艦砲弾が青い光りを放って高い空を飛んでいる。宜里方面では、砲弾のきたようだ。各小隊の兵隊が、いそがしそうに走りまわっている。

—大砲撃を利して総攻撃にうつる

一分隊の佐藤武夫上等兵の手記によって、四月二十九日以降の工藤中隊の行動をつづる）

牧港の入り江にかけた舟橋を渡る米軍—米陸軍琉球司令部提供

サク裂が赤い火炎をあげている。

佐藤上等兵は、第三中隊長工藤国雄大尉のところへ行ってみた。中隊に、何か重大な命令がつるーということを佐藤上等兵は知った。

第三中隊は、食糧、弾薬を整備し、夜間、陣地を出発した。

〈敵は近くまできているな〉

佐藤上等兵は、前方の斜面から、米軍の曳光弾が赤い尾をひいて発射されているのを見た。

前進中の中隊の周辺にしきりに砲弾がサク裂する。戦死者が出る。負傷兵がうなり叫ぶ。行進がはかどらない。第二分隊長中島三郎伍長が切り込みで戦死して以来、佐藤上等兵が分隊の指揮をとっていた。

糸満町米軍の陣地を出発してまだ幾日もたっていないのだが佐藤分隊長は、ずいぶん長い月日がたったような気がした。戦友の数が日一日と少なくなってゆくのが心細い。やがて自分たちも消えてゆくのだと思うと、戦死者、負傷者がでても、悲しみは湧かず、怒りを覚えた。

砲弾のサク裂するなかを負傷者がくぐりぬけ、中隊は、やっと目的地についたらしかった。そこは岩石がゴロゴロの山の斜面で、松の木や雑木のみどりが、まだ残っているのがかすかしかった。

分隊員は、あたりにちらばって休せた。小隊長伊藤少尉が中隊長・工藤大尉のところへ走る。何事かの雰囲気で、一帯は星のように明るい。ポウ、ポウ、ポウ—と砂を音をたてて、青白い炎が飛んできた。落し、青白い炎は飛びちり、燃えたした。

蒸地で人間かリンが燃えているようで気味がわるい。曳光弾（おうりんだん）だ。それが、佐藤分隊長のそばで、ポフーとにぶい音をたてて炸裂し、火花が軍服の袖口に飛び散った。袖口が青白い炎をあげて燃え出した。あわてて手で打ちはらうと、手のひらに青白い炎が移って燃える。熱くないのが不思議だ。分隊長は、草をむしりとって消火した。

時々、軍上で、すさまじい音がし、弾片がアラレのように地面に突きささる。そのおそろしさに、佐藤分隊長はひたいに油汗をかいていた。身をかくす物がない。分隊員からこれ以上の犠牲者は出したくない。（早くここを移動すればいい）祈るような気持ちだった。

戦記係からの公開会員募集

旧第七師団戦記係谷五郎氏は札幌市北三条四丁目に出発。約一カ月にわたる旅程を終え、五月二十六日帰札した。

講演　山長師団参謀、故本間寅次郎氏遺族天下人・本間恭子さん（札幌市・月寒）

沖縄戦に出た師団

6月3日

新聞用刀の師団川、大砲掃除の鉄で四郎対立

南水分号伊藤（二十歳）米軍捕虜一。

あゝ沖縄

戦没一万八千五柱の英霊にささぐ

<64>

工藤中隊

両足だけ残し

直撃弾を受け飛び散る

佐藤分隊長が身のちぢむ恐怖にかられているとき、遠くで移動命令が出た。斜面からそのなかを、三百米前進。右のふもとについて、分隊員は各自でタコツボを掘り、身をかくした。

一番はずまいクボ地。タコツボ間の距離は、せいぜい五、六十米しかなかった。丘のふもとは、タコツボでいっぱいだ。この丘の左側のクボ地は畑であった。佐藤岩雄上等兵に急遽爆薬をたせ、戦車特攻の任務を与えて配置した。

佐藤分隊長は、機関銃手中山徳三郎一等兵と、弾薬手奥原一等兵を、左側の台地に九人ばかりの笠兵を、右側の台地にはなして配置し、敵の襲来にそなえた。佐藤分隊長は壕底が一台あった。中山と奥原が壕内方面に分遣中、他隊のものを奪んできたのだ。武器不足の分隊でいは、壕底を二台持っていることが心強かった。

三十分はたすると、奥原弾薬手が自ゆ、分隊の位置へ帰ってきた。中山機関銃手が行くえ不明になった」という。佐藤上等兵は二人の守備位置へ行って見た。野機の尾部板（しようびはん、銃の尾部）が残っているだけで、中山一等兵の姿がない。（直撃弾をうけたな！）佐藤分隊長は状況を呑みとった。

佐藤分隊長は、中山一等兵が、何一つかくれる物のない場所へ、二人を配置した自分の考えの浅さがうらめしかった。

（せめて、中山一等兵の肉の切れはしでも落ちていないかー）

地面をはいまわり、手さぐりして、しきり捜しまわったが、遂に何一つ発見することはできなかった。負傷した奥原弾薬手は病院へ後退させた。

（大事な野機を失い、そのうえ補充者二人を出してしまった）分隊長は、深く自責の念にかられた。

夜が明けた。毎日のことだが、夜明けとともに、あたりは、急にそわそわしなってきた。戦車のキャタピラの音が、遠くから聞こえてきた。前線だから、砲撃や爆撃はない。そのかわり、すぐ敵兵が姿を現わす。前に出してある監視兵からの伝令がきた。

『前方おゝ地に、戦車二台が出現』（いよいよきたか、今度はおれたちの番だ！）佐藤分隊長は、身のひきしまるのを感じた。畑の中には、戦車特攻の佐藤岩雄上等兵を配置してある。

（戦車が、あそこまでくれば、きっとやられる！）分隊長は自信をもっていた。

戦車砲のかたい音がする。松の木の小枝がゆれる。その有様を佐藤分隊長は、タコツボの中から見上げていた。松の木に戦車機銃弾があたり、小枝がふっ飛ぶ。見る見るうちに枝はなくなり、木は一本の棒になった。ふたたび伝令。

『戦車のうしろから、黒んぼの兵隊が現われた』

佐藤分隊長は、気が気でなかった。じっとしていれなくなって、敵状の見えるところまで、はって出た。

くぼ地一面は畑で、ところどころにキャベツがはえている。その三百米ほど先に、大きな戦車の上部だけが見えた。黒人兵は、この戦車よりも二百米前、佐藤分隊長の位置からは目ばぐらいさきの観測にいた。

黒い制服、鉄帽のほうが白く見えるくらいだ。素はだに薄い軍服一枚きりの身軽な姿。胸のあたりが盛上げの運動のように盛りあがり、黒光りしている。見るからに強そうだ。

佐藤分隊長は、生まれてはじめて見る大きな、黒い黒人兵を見て、

（これは大変なやつがきたもんだー）と思った。黒人兵は、前にはえていたキャベツを一つもぎとると、サッと姿をかくした。

しばらくすると、別の黒人兵が一ぱいはとはなれたところからチョコンと黒い顔を出した。あたりを、キョロ、キョロ見まわし、キャベツをとると、すばやく姿をかくす。そのかっこうが、笑いたくなるほどユーモラスだ。彼等もタコツボの中にはいっているらしく、キャベツの葉を、三枚ポンポンと頭の下から地面へほうりなげ、

（黒い物のやつ、腰をすかしてキャベツを食べているなー、こんなやつ等なら大じょうぶだ）

佐藤分隊長は、黒人兵の性質を見抜き、安心してタコツボへ戻った。

その後、情報は、いろいろ伝わってきたが、米軍が前進してくる気配は全然なかった。

夕方近くなって、佐藤岩雄上等兵戦死の報が佐藤分隊長のもとへ伝わってきた。

（さきには、中山一等兵、いまは、また二人！）からぬけ力がぬけていくようだ。

（一緒に配置され、ずっと親密だった佐藤岩雄、小笠原秋雄）

隣の戦友に知らせようとして、隣のタコツボに飛び込んだ瞬間、戦車砲弾の直撃をうけ、両足だけを残して飛び散ったーという。

ことを、佐藤武夫分隊長が知ったのは中隊分隊長と切り込に行き、無事に戻ってきた後）分隊長には佐藤上等兵の戦死が痛恨だった。

―佐藤上等兵が、敵襲出現をー（孔嶺市・月岳）

高地西方の斜面の日本軍の洞穴。のち米軍が利用した
―米陸軍琉球司令部提供―

沖縄戦ごよみ

6月4日

米軍、小禄南東方上陸。台風により米軍三千六隻調査をうける。

原字　山岳団司令部、故本間喜久夫団長未亡人・本間恭子さん

七師団戦記

あゝ沖縄

<65>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

沖縄戦士たちの面影

6月5月

米軍小銃部隊攻撃

佐藤第六分隊長（釧路市出身、通六ノ三二）は出入兵を監視しつつけた。出入兵は、一度、ギャベツとに姿を現わしたきり、出てこない。攻めてこない米軍と向きあったまま夜になった。

伊藤小隊長と三年兵（氏名不明）がヤミにまぎれ敵状偵察に出発した。小隊の全員が無事を祈りつつけたかいもなく二人ついに帰ってこなかった。

五十嵐克己伍長が小隊の指揮をとることになり、敵状偵察のため、タコツボの兵の上へ登った。とたんにソ連製をうけ、ころがり落ちてきた。

「残念！残念だ…」

重傷の五十嵐伍長は、苦しそ

母の名をよぶ

名を呼んで死んでいった。

「五十嵐伍長殿！」と叫んだ。りっぱな軍人らしい最期だった。伍長の戦死は、分隊長の脳裏に強く焼きつけられた。

その夜（五月四日）突撃命令がおりた。小隊長に横井正太郎軍曹が任ぜられ、小隊長以下全員、銃剣、装備をつけて集合した。遠雷のように敵弾がとどろく。遠い砲撃で敵弾のサク裂する火花が、血のように赤い。

伊藤第一大隊長の最後の訓示が行なわれた。

「諸士たちは、いま、重大な任務をもって出発する。前方の敵を撃破していただきたい。諸士らが血路を開くのを待って、わが軍は総攻撃を開始する。この名誉ある戦闘に参加する諸士らは、しあわせである…」

伊藤中隊長からも

「すでに死は覚悟していると思う。軍隊手帳、その他所持品いっさいは穴に埋めるよう。敵に捕虜がもれないように処置せよ。成功を祈る。これより親下賜品を授ける。」

飯ごうのふたにつがれた酒が、兵隊間をまわし飲みで次々に手渡しされた。つづいて、火がつけたタバコが手送りされてきた。

佐藤分隊長は緊張に緊張していた。はだ寒いような、頭の先から足先まで締めつけられるような、なんとも言いようのない心境！

いよいよ、最後の時がきたなゝ

酒を飲み、タバコを吸う。終わった兵隊たちは、黙々と軍隊手帳、手紙、好き、その他の私物品を穴にうめている。だれ一人、ものをいう者はない。

佐藤分隊長は、体内の酒の酔いが、だんだん、大きくなってゆくのを感じた。神経がにぶくなる。緊張感は薄らぎ、涙がでる。

耳に厳く号令がひびく。めざす視界は、涙でかすんで、夢まぼろしのようなゆくえ。なにもかも忘れ去られてゆくようだ。ただ存在するものは、これからの戦闘だけ。

ああ、最後だな——

すべてが遠くへ

大きな岩山のふもとについた。義軍小隊長が佐藤分隊長を呼ぶ。第二小隊（長・伊藤少尉）は、ふもとを攻撃することになっていた。畑つづきのがけ下に敵がいる。

地形偵察の任務をもつ佐藤分隊長は、兵二人を通れ、右側の斜面を畑のミゾつたいに登る作戦をたてた。

まず、兵二人は、下に待たせ分隊長が上がっていった。義軍小隊長が敵状偵察に勝まりかえった地面が、照明弾で明るく照らし出される。十数ぼのぼったとき至近距離で敵兵の姿はない。ぼっくしてまた。

ふたたび、二、三発が射撃サク裂した。

分隊長は、自分の行動を敵兵が監視しているのに気がついた。伏せたまま、もう一度、あたりを見回した。瞬間、目の前が強烈に光った。頭に激しい衝撃。目がクラクラして、仇敵のすべてがツーンと遠くへ去ってゆくような感じ

ああ、最後だな…

佐藤分隊長の意識は、ここで消えた。

高地から見た前田丘陵　米陸軍琉球司令部提供

ぼうしの世界のよう。そこへ向かって、思い切った第一歩を踏あたりをソロソロ見回した。敵

「出発／前進ッ」

編記係から

一二日付けで現役青森市の（一千円）が、東京市麻布一番町六丁目、山本実さんから本社に送付された。文面によると、発じ出し人は山本氏の恩師で山本氏は横州第二七〇部隊第二大隊本部服部隊第一小隊第二分隊の一員として横州から沖縄移動のため下関に到着したが、任務中の事故で重傷を負い、沖縄へは行かれなかった。六月二十一日（日）午後二時から沖縄在住の北海道友の会の人々が慰霊を挙行するとのことなので、お花の一本でも戦友の霊にささげてほしいとあった。

訃報

山長国司令部、故木崎春人矢曹長未亡人・木崎芳子さん

（札幌市・月寒）

右も左も戦死

頼みの重機、遂にこず

動くものなし

沖縄戦士たちの面

6月6日

米軍、小禄飛行場を占領。陸戦隊の抵抗つづく

七師団戦記

あゝ沖縄

戦没一万八千五柱の霊にささぐ

<66>

寒さを感じ、佐藤分隊長が正気づいたときは、日がくれかけていた。

〈どのぐらいたったのだろう？〉

記憶をなでてみた。メガネと鉄帽がない。あおむけに倒れている自分に気づく。鉄帽は、すぐそばにころがっていた。爆風をうけただけで、これというけがはしていない。

とたんに、夜襲のサク裂。うしろへさがろうとして、穴へ落ちた。グンニャリ、やわらかいものを踏んだ。穴の底に風人兵が死んでいる。穴からぬけ出し斜面の下へおりた。

歩いているうちに、いつの間にか、夜になり、こまかい雨が降りだした。分隊長は小隊の位置に戻った。

うしろの岩陰では、第二大隊が血路を開くのを待っている。

第二小隊の夜襲班二十五人は、横に二列に散り、小隊長を先頭に、ほゝく前進を開始した。

佐藤分隊長は、鉄帽のなかに立ちあがって走り、壕のなかへかけ込んだ。

〈敵前三十メートルぐらいか、もっと近いかもしれぬ〉

佐藤分隊長は、鉄帽のなかに伏せ、前の小隊長を見失うまいとした。自分についてきている者がだれか、全然わからない。

ただが、それでも、手りゅう弾を投げ込む合図をした。すぐ、手りゅう弾の安全ピンを抜き取り、鉄帽にうちつけて敵壕に投げ込む。

第二小隊の夜襲班二十五人のくるのを待ってでもいるかのように、小隊長の命令を待っている。

遂に、第二小隊長は、しびれをきらしたらしい。

佐藤分隊長は、ガケのふちに手をのばし、前方をうかがった。敵兵の姿は全然見当たらない。あたりを見回した。味方は、一人も動いている者がいない。倒れている石剣の兵隊をゆすってみた。死んでいる。右側にも、ゆすって答えない戦死体。足元の鉄帽も、いくら押しても、応ずる気配がない。かすかなうめき声が、あちこちから聞こえてくる。佐藤分隊長は、全員戦死を直感した。

佐藤分隊長は、その将に戦術的に伏せた。小隊長第一中隊長、軍曹、召集兵田中義輝上等兵、三年兵加藤正義上等兵の三人が、ズルズル…とガケ下へすべり落ちていった。

〈三人とも、もう死んでいるな？〉

落ちてゆく三人の姿勢から死体を感じた。

砲弾が、佐藤分隊長のまわりで何発もサク裂する。うなり声が、陣から聞こえる。だれかやられたことはわかるが助けてやれない。

分隊長は、ガケのふちに手をのばし、前方をうかがった。敵兵の姿は全然見当たらない。あたりを見回した。味方は、一人も動いている者がいない。倒れている石剣の兵隊をゆすってみた。死んでいる。右側にも、ゆすって答えない戦死体。足元の鉄帽も、いくら押しても、応ずる気配がない。かすかなうめき声が、あちこちから聞こえてくる。佐藤分隊長は、全員戦死を直感した。

あがる。敵陣からの猛射。

佐藤分隊長は、その将に戦術的に伏せた。小隊長第一中隊長、軍曹、召集兵田中義輝上等兵、三年兵加藤正義上等兵の三人が、ズルズル…とガケ下へすべり落ちていった。

〈三人とも、もう死んでいるな？〉

落ちてゆく三人の姿勢から死体を感じた。

砲弾が、佐藤分隊長のまわりで何発もサク裂する。うなり声が、陣から聞こえる。だれかやられたことはわかるが助けてやれない。

分隊長は、ガケのふちに手をのばし、前方をうかがった。敵兵の姿は全然見当たらない。あたりを見回した。味方は、一人も動いている者がいない。倒れている石剣の兵隊をゆすってみた。死んでいる。右側にも、ゆすって答えない戦死体。足元の鉄帽も、いくら押しても、応ずる気配がない。かすかなうめき声が、あちこちから聞こえてくる。佐藤分隊長は、全員戦死を直感した。

米軍の猛爆撃地獄＝米陸軍琉球司令部提供

「重機は、どうしたんだッ！〈撃ち込むシュル、シュル、シュル…という長い音がひびき、突撃だッ！〉低いが、イライラした声で叫んだ。

佐藤分隊長は、たまってうな

「重機は、どうしたんだッ！〈撃ち込むシュル、シュル、シュル…という長い音がひびき、突撃だッ！〉低いが、イライラした声で叫んだ。

佐藤分隊長は、たまってうな

もう、夜があけるぞ。これ以上待っていられない。よーしッ、

弾丸が前方へ飛んでゆく。

「発煙筒が前」落ちた。「間」

電線がはられる。兵隊は一斉に

た付近一帯に、アキ地図を敵陣へ

つぱり、走った。小隊長は二メートルほど前方、そのうしろに、分隊員が横一列になって、走りに走った。

パッと明るくなり、突撃する兵隊の姿が、光りのなかに浮き

あきらめない。ただ、だれか人

第二小隊の夜襲班二十五人は、横に二列に散り、小隊長を先頭に、ほゝく前進を開始した。佐藤分隊長のうしろに佐藤分隊長がつづいた。静かであっ

すいた。

〈敵前三十メートルぐらいか、もっと近いかもしれぬ〉

佐藤分隊長は、鉄帽のなかに伏せ、前の小隊長を見失うまいとした。自分についてきている者がだれか、全然わからない。

ただが、それでも、手りゅう弾を投げ込む合図をした。すぐ、手りゅう弾の安全ピンを抜き取り、鉄帽にうちつけて敵壕に投げ込む。

第二小隊の夜襲班二十五人のくるのを待ってでもいるかのように、小隊長の命令を待っている。

遂に、第二小隊長は、しびれをきらしたらしい。

佐藤分隊長は、ガケのふちに手をのばし、前方をうかがった。敵兵の姿は全然見当たらない。あたりを見回した。味方は、一人も動いている者がいない。倒れている石剣の兵隊をゆすってみた。死んでいる。右側にも、ゆすって答えない戦死体。足元の鉄帽も、いくら押しても、応ずる気配がない。かすかなうめき声が、あちこちから聞こえてくる。佐藤分隊長は、全員戦死を直感した。

訃報　山兵団司令部、故本間寡久矢曹長未亡人・本間恐子さ（札幌・月寒）

七師団戦記

あゝ沖縄

<67>

戦死、負傷が続出

兵隊の群に艦砲弾さく裂

生き残りの三人

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

佐藤武夫分隊長は、だれか生きている者はいないか、動いている者はいないか、と、伏せたまま、のび上がってあたりを見回した。

第二小隊の夜襲隊員は二十五人。それが、またたくまに全員戦死するとは一信じられないことであった。眼前で展開されたいまの光景が、夢であればいいと思った。

照明弾が、まぶしいほど明るい。上半身を起き上がらせただけで、たちまち、砲弾が集中する。耳を聾弾され、頭もあげれない。分隊長は信号をとりに回し、手当てをした。

与那嶺上等兵は、手当てをうけながらも、また

「分隊長殿、どうします？突っこみますか？」とたずねている。分隊長は、生き残った名同士の戦友愛を与那嶺上等兵に感じた。

「生きているのは、おれとお前のふたりきりだぞ。この状況

「アッ、やられたッ！」

与那嶺は、大声で叫び、頭をさけた。

「バカヤロウ、さがれッ！」

「分隊長殿ッ、どうしますか？」

沖縄出身の幹部候補生、与那嶺上等兵だ。佐藤、分隊長に低い声で指示した。

「さがれ」

その声が、与那嶺上等兵には聞こえなかったのか、それとも理解できなかったのか、また大声で、佐藤分隊長に話しかけてきた。

とたんに、与那嶺上等兵のすぐ前で、砲弾がサク裂。

分隊長は、たまりかねてどなる。中隊長殿に報告しなければならない。安全な場所までさがろ

「こんなところで、こんないやつを殺してなるものか！」

ふたりは、はったり、走った。

怒りに似た気持ちで、はってうしろへさがった。与那嶺上等兵の四肢をひっぱり、くぼ地へひきずり込んだ。

砲弾の破片が、上等兵の鉄帽をつらぬき、頭の右側面をかすめたらしい。負傷だが出血がひどい。

仲間にあった伊藤一等兵の声がかかる。佐藤分隊長も、いまとなっては、一人でも生き残っていたことがうれしかった。

与那嶺、伊藤に、ここを動くなといい、佐藤分隊長は一人で中隊（報告に戻った。途中、子弾士の戦友愛を与那嶺上等兵に感じた。

前のふたりきりだぞ。この状況

分隊（報告に戻ったとき、佐藤さんは名前を忘れた）に出会い、夜襲が失敗し生残者は三人。報告に戻るとろだ」と説明した。

部隊の上空を、米観測機が旋回しはじめた。伊東大隊長は、すぐ、転進命令を出したが、その命令が徹底しないうちに、はやくも敵の艦砲弾が、密集している部隊のなかでサク裂した。

逃げまどう兵隊の群れのなかに、続けざまに艦砲弾がサク裂する。たちまち、戦死者、負傷者が続出。伊東大隊長以下、将校たちは

「さがれッ！」

「退去セッ」と狂ったようにどなりつづける。佐藤分隊長は、眼前に展開される、幽鬼のごとくたたずんでいる岩かげにたどりついたとき

「攻撃失敗。全員戦死。生き残りは佐藤上等兵以下三人」

工藤中隊長は、佐藤分隊長の報告をきくと、みるみるうちに顔面をそう白となった。伊東大隊長の前に立つと

「申しわけありません」

頭を下げたまま、うなだれて

二人が、第二大隊が待機している岩かげにたどりついたとき

は、夜が明けていた。

「攻撃失敗。全員戦死。生き残りは佐藤上等兵以下三人」

走った。

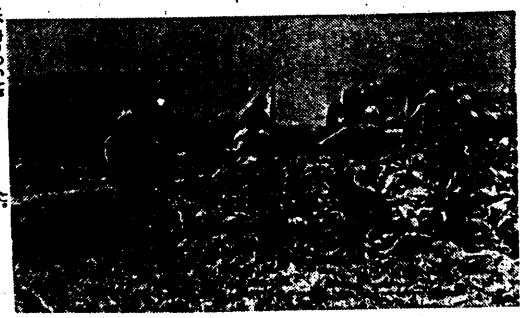
穴にひそむ二人をうながし、ふたたび弾幕のなかへ！。破片も飛弾も、からだに当たらないのがふしぎだ。米軍は、三、四百人ぐらいの兵の上から艦砲弾をあびせかけた。

いやいや、あのときのように、ひょっとすると、帰ってくるかもしれない。佐藤分隊長は、与那嶺上等兵の戦死をなかなか納得することができなかった。

砲弾をあびる。その火の尾をひいた弾丸が、三人のまわりに飛びはねる。

無我夢中で走り、夜襲に出発するまえの、兵の集地に、やっと帰りついた。

ホッとしてみると与那嶺上等兵の姿がなかった。「戦死かな？」分隊長は、自分にたずねた。



大山付近で砲撃中の米陸軍第一海兵隊戦車隊の米陸軍流球司令部提供

沖縄戦ことしの夏

6月7日

米軍、小禄村

当を占領

具志、糸満村武

顔写真　山岳部隊司令部、故工藤部隊長

寄久矢青年学校二人・本間部隊長

（北鳴新聞・月刊）

七軍団戦記

あゝ沖縄

<68>

戦没一万八十五柱の英霊にささぐ

軍歌を口ずさみ

勝ち気の網谷一等兵死す

山三四七五部隊は、四月二十三日午前九時、出撃命令をうけ、島尻郡岡崎部落の草ぶき兵舎を午後十時出発した。

第一大隊（兵・伊東孝一大尉）第一機関銃中隊（兵・座喜味中尉）の第一小隊長鷹山曹長（札幌）は敵のこない岩かげ小隊の全員を集め、最後の訓示をおこなった。それは、力のこもった声で、たった一言。

「お前たちの一命は、俺があずかる」

鷹山少尉のすごいまなざし。そんとは、まったくうらはら、口元には、かすかなほほえみがうかんでいる。「笹島軍曹」吹き飛ばされた。二人とも助からないだろう。ひどい重傷だ。それなのに、図ノウ、図ノウと重要書類をいれた図ノウのことばかり心配していた」ということ

部隊は敵弾のなかを北上した。国場川にかかる一日橋の近くまできたとき、集中砲火を浴びた。二十数ぼう前方から、人夫の補充隊男性と小野島間曹長（砲兵）がやられた」という声が伝わってきた。恒島兵長は曹長にかけつけたかった。だが、敵弾が激しくて近寄れない。くぼ地にはいって伏せた。そばの兵隊が、補充と曹長の負傷した時の状況を話してくれた。

「補充隊員は、腰に電話機をうけた。小野曹長は、右足を

えみがうかんでいる。

兵長（補充部隊第一大隊）は、それなのに、図ノウ、図ノウと

米軍の進撃は優勢だった。第二中隊は、敵の攻撃をうけ、みるみるうちに全滅状態に追いこまれた。網谷信一等兵（札幌市・月寒）が、第二大隊本部と第二中隊間の連絡にあたっていたが、恒島兵長の目の前で倒れた。

「網谷、しっかりせい！」

兵長がかけよると、網谷一等兵は、うめきながらも、力のこもった声で

「くやしい…やられた…」

と、血の気のない顔で答えた。抱きおこすと、右モモに砲弾の破片をうけ、足がちぎれそうになっている。

人の重傷では、助からな

そう思いながらも、恒島兵長は、網谷一等兵のからだを抱き

兵長の顔を見つめ

「大じょうぶです」

と元気よく答えた。恒島兵長

長に頼る。といい、

「勝ってくるぞと勇ましく

ちかって国を出たからは

手柄たてずに帰られよか…」

「遺骨ラッパきく

たびにまぶたにうかぶよ…」

と軍歌の一節を歌いながら息をひきとったーということである。

山三四七五部隊第一大隊第一機関銃中隊の編成（笹島軍曹・高田鉄太郎（日高・五月十三日戦死）石川修（名護市・恩納村・五月七日戦死）伊藤喜代造（南風原町・五月七日戦死）▽中隊長座喜味（山形県出身・五月七日戦死）▽小隊長鷹山曹長（札幌・五月四日・真栄平付近一帯で戦死）▽小野島（砲兵・五月六日戦死）▽人夫係（補充隊員）（山形市・戦前防衛庁長官・故・長谷川清）▽人夫係（補充隊員）（札幌市・五月十九日・四〇歳）勝田平次郎（札幌市・五月九日戦死）▽同力（宮城県・五月六日戦死）▽同力（宮城県・五月六日戦死）▽同力（宮城県・五月六

あゝ沖縄

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

吉岡兵長の死

衝撃で息絶え

〝貴様の分も俺が…〟

小渡部の南方二㌔には、中城湾がある。米軍隊は中城湾から小渡部敵陣にたえまなく艦砲弾を撃ち込んだ。笹島兵長の班一機関銃中隊は、右側山から艦砲をあびながら、前方の敵陣を撃ち、攻めてくる米軍に応戦していた。

機関銃を射撃中の笹島兵長の目の前で一瞬、強烈な光りがきらめいた。それきり意識を失った。

どれくらい時間が経過したかは。

「吉岡、しっかりせッ！しっ」

笹島兵長が正気ついてみると射撃をしていた場所から十㍍ほども飛ばされている。眼には、小石が突きさり、機関銃も遠くへ飛ばされていた。強烈なショックをうけたらしい。だが、頭をおさえ、目をなでてみたがなんの異常もない。

（俺は死なかったんだ…）

大きく息をすいこみ、からだに力をいれて、生きている喜びをたしかめた。

あたりは、真っくら。人の気配がする。兵長はヤミをすかして見た。十二、三㍍さきに、フラフラしながら歩いている者がいる。近よって見た。吉岡兵長（仮名）だ。

「吉岡！吉岡！」

呼んでも答えない。肩をかおかしい。いまのショックで、頭にやられたらしい。笹島兵長が抱きかかえると、吉岡兵長が見たものは、敵がかかるのが同時だった。

（バカッ！死にやがって…）

笹島兵長は、死のおそろしさ、かなしさ、さびしさが、一度におしよせてくるようで、じっとしてはいられなかった。

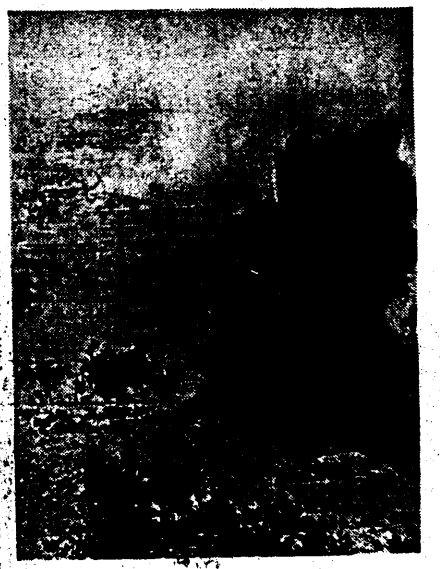
（よし、戦友の分も、俺がやる。吉岡、見ていろ）

四月二十九日午後六時、転進命令が出た。戦友たちは

（ああ、また死なねばならんのか…）

口ではいわなくとも、その気持ちを、ことばはしたに明確な表情にうかべ、たがいに顔を見合わせている。米軍隊は中城湾から敵をやっつけるぞ！その風いが、強くわきあがった。笹島兵長は、この時以来、戦場も死も、もう、おそろしいものとは思えなくなり、いままでの自分ではなくなったような気持ちになった。

笹島兵長ら七五部隊は、午前零時、石砲に近い平良町に向かって前進を開始した。照明弾があがるく、敵軍が近くでサク撃する。部隊の移動は、敵に知られないよう注意していた。



米軍の進撃を防ぐ日本軍陣地

供提部部隊

沖縄戦さまの間

6月9日

米軍、豊見城まで、第四、第五師団、第二、第三、第六、第七、第八、第九、第十、第十一、第十二、第十三、第十四、第十五、第十六、第十七、第十八、第十九、第二十、第二十一、第二十二、第二十三、第二十四、第二十五、第二十六、第二十七、第二十八、第二十九、第三十、第三十一、第三十二、第三十三、第三十四、第三十五、第三十六、第三十七、第三十八、第三十九、第四十、第四十一、第四十二、第四十三、第四十四、第四十五、第四十六、第四十七、第四十八、第四十九、第五十、第五十一、第五十二、第五十三、第五十四、第五十五、第五十六、第五十七、第五十八、第五十九、第六十、第六十一、第六十二、第六十三、第六十四、第六十五、第六十六、第六十七、第六十八、第六十九、第七十、第七十一、第七十二、第七十三、第七十四、第七十五、第七十六、第七十七、第七十八、第七十九、第八十、第八十一、第八十二、第八十三、第八十四、第八十五、第八十六、第八十七、第八十八、第八十九、第九十、第九十一、第九十二、第九十三、第九十四、第九十五、第九十六、第九十七、第九十八、第九十九、第百、第百一、第百二、第百三、第百四、第百五、第百六、第百七、第百八、第百九、第百十、第百十一、第百十二、第百十三、第百十四、第百十五、第百十六、第百十七、第百十八、第百十九、第百二十、第百二十一、第百二十二、第百二十三、第百二十四、第百二十五、第百二十六、第百二十七、第百二十八、第百二十九、第百三十、第百三十一、第百三十二、第百三十三、第百三十四、第百三十五、第百三十六、第百三十七、第百三十八、第百三十九、第百四十、第百四十一、第百四十二、第百四十三、第百四十四、第百四十五、第百四十六、第百四十七、第百四十八、第百四十九、第百五十、第百五十一、第百五十二、第百五十三、第百五十四、第百五十五、第百五十六、第百五十七、第百五十八、第百五十九、第百六十、第百六十一、第百六十二、第百六十三、第百六十四、第百六十五、第百六十六、第百六十七、第百六十八、第百六十九、第百七十、第百七十一、第百七十二、第百七十三、第百七十四、第百七十五、第百七十六、第百七十七、第百七十八、第百七十九、第百八十、第百八十一、第百八十二、第百八十三、第百八十四、第百八十五、第百八十六、第百八十七、第百八十八、第百八十九、第百九十、第百九十一、第百九十二、第百九十三、第百九十四、第百九十五、第百九十六、第百九十七、第百九十八、第百九十九、第二百、第二百一、第二百二、第二百三、第二百四、第二百五、第二百六、第二百七、第二百八、第二百九、第二百十、第二百十一、第二百十二、第二百十三、第二百十四、第二百十五、第二百十六、第二百十七、第二百十八、第二百十九、第二百二十、第二百二十一、第二百二十二、第二百二十三、第二百二十四、第二百二十五、第二百二十六、第二百二十七、第二百二十八、第二百二十九、第二百三十、第二百三十一、第二百三十二、第二百三十三、第二百三十四、第二百三十五、第二百三十六、第二百三十七、第二百三十八、第二百三十九、第二百四十、第二百四十一、第二百四十二、第二百四十三、第二百四十四、第二百四十五、第二百四十六、第二百四十七、第二百四十八、第二百四十九、第二百五十、第二百五十一、第二百五十二、第二百五十三、第二百五十四、第二百五十五、第二百五十六、第二百五十七、第二百五十八、第二百五十九、第二百六十、第二百六十一、第二百六十二、第二百六十三、第二百六十四、第二百六十五、第二百六十六、第二百六十七、第二百六十八、第二百六十九、第二百七十、第二百七十一、第二百七十二、第二百七十三、第二百七十四、第二百七十五、第二百七十六、第二百七十七、第二百七十八、第二百七十九、第二百八十、第二百八十一、第二百八十二、第二百八十三、第二百八十四、第二百八十五、第二百八十六、第二百八十七、第二百八十八、第二百八十九、第二百九十、第二百九十一、第二百九十二、第二百九十三、第二百九十四、第二百九十五、第二百九十六、第二百九十七、第二百九十八、第二百九十九、第三百、第三百一、第三百二、第三百三、第三百四、第三百五、第三百六、第三百七、第三百八、第三百九、第三百十、第三百十一、第三百十二、第三百十三、第三百十四、第三百十五、第三百十六、第三百十七、第三百十八、第三百十九、第三百二十、第三百二十一、第三百二十二、第三百二十三、第三百二十四、第三百二十五、第三百二十六、第三百二十七、第三百二十八、第三百二十九、第三百三十、第三百三十一、第三百三十二、第三百三十三、第三百三十四、第三百三十五、第三百三十六、第三百三十七、第三百三十八、第三百三十九、第三百四十、第三百四十一、第三百四十二、第三百四十三、第三百四十四、第三百四十五、第三百四十六、第三百四十七、第三百四十八、第三百四十九、第三百五十、第三百五十一、第三百五十二、第三百五十三、第三百五十四、第三百五十五、第三百五十六、第三百五十七、第三百五十八、第三百五十九、第三百六十、第三百六十一、第三百六十二、第三百六十三、第三百六十四、第三百六十五、第三百六十六、第三百六十七、第三百六十八、第三百六十九、第三百七十、第三百七十一、第三百七十二、第三百七十三、第三百七十四、第三百七十五、第三百七十六、第三百七十七、第三百七十八、第三百七十九、第三百八十、第三百八十一、第三百八十二、第三百八十三、第三百八十四、第三百八十五、第三百八十六、第三百八十七、第三百八十八、第三百八十九、第三百九十、第三百九十一、第三百九十二、第三百九十三、第三百九十四、第三百九十五、第三百九十六、第三百九十七、第三百九十八、第三百九十九、第四百、第四百一、第四百二、第四百三、第四百四、第四百五、第四百六、第四百七、第四百八、第四百九、第四百十、第四百十一、第四百十二、第四百十三、第四百十四、第四百十五、第四百十六、第四百十七、第四百十八、第四百十九、第四百二十、第四百二十一、第四百二十二、第四百二十三、第四百二十四、第四百二十五、第四百二十六、第四百二十七、第四百二十八、第四百二十九、第四百三十、第四百三十一、第四百三十二、第四百三十三、第四百三十四、第四百三十五、第四百三十六、第四百三十七、第四百三十八、第四百三十九、第四百四十、第四百四十一、第四百四十二、第四百四十三、第四百四十四、第四百四十五、第四百四十六、第四百四十七、第四百四十八、第四百四十九、第四百五十、第四百五十一、第四百五十二、第四百五十三、第四百五十四、第四百五十五、第四百五十六、第四百五十七、第四百五十八、第四百五十九、第四百六十、第四百六十一、第四百六十二、第四百六十三、第四百六十四、第四百六十五、第四百六十六、第四百六十七、第四百六十八、第四百六十九、第四百七十、第四百七十一、第四百七十二、第四百七十三、第四百七十四、第四百七十五、第四百七十六、第四百七十七、第四百七十八、第四百七十九、第四百八十、第四百八十一、第四百八十二、第四百八十三、第四百八十四、第四百八十五、第四百八十六、第四百八十七、第四百八十八、第四百八十九、第四百九十、第四百九十一、第四百九十二、第四百九十三、第四百九十四、第四百九十五、第四百九十六、第四百九十七、第四百九十八、第四百九十九、第五百、第五百一、第五百二、第五百三、第五百四、第五百五、第五百六、第五百七、第五百八、第五百九、第五百十、第五百十一、第五百十二、第五百十三、第五百十四、第五百十五、第五百十六、第五百十七、第五百十八、第五百十九、第五百二十、第五百二十一、第五百二十二、第五百二十三、第五百二十四、第五百二十五、第五百二十六、第五百二十七、第五百二十八、第五百二十九、第五百三十、第五百三十一、第五百三十二、第五百三十三、第五百三十四、第五百三十五、第五百三十六、第五百三十七、第五百三十八、第五百三十九、第五百四十、第五百四十一、第五百四十二、第五百四十三、第五百四十四、第五百四十五、第五百四十六、第五百四十七、第五百四十八、第五百四十九、第五百五十、第五百五十一、第五百五十二、第五百五十三、第五百五十四、第五百五十五、第五百五十六、第五百五十七、第五百五十八、第五百五十九、第五百六十、第五百六十一、第五百六十二、第五百六十三、第五百六十四、第五百六十五、第五百六十六、第五百六十七、第五百六十八、第五百六十九、第五百七十、第五百七十一、第五百七十二、第五百七十三、第五百七十四、第五百七十五、第五百七十六、第五百七十七、第五百七十八、第五百七十九、第五百八十、第五百八十一、第五百八十二、第五百八十三、第五百八十四、第五百八十五、第五百八十六、第五百八十七、第五百八十八、第五百八十九、第五百九十、第五百九十一、第五百九十二、第五百九十三、第五百九十四、第五百九十五、第五百九十六、第五百九十七、第五百九十八、第五百九十九、第六百、第六百一、第六百二、第六百三、第六百四、第六百五、第六百六、第六百七、第六百八、第六百九、第六百十、第六百十一、第六百十二、第六百十三、第六百十四、第六百十五、第六百十六、第六百十七、第六百十八、第六百十九、第六百二十、第六百二十一、第六百二十二、第六百二十三、第六百二十四、第六百二十五、第六百二十六、第六百二十七、第六百二十八、第六百二十九、第六百三十、第六百三十一、第六百三十二、第六百三十三、第六百三十四、第六百三十五、第六百三十六、第六百三十七、第六百三十八、第六百三十九、第六百四十、第六百四十一、第六百四十二、第六百四十三、第六百四十四、第六百四十五、第六百四十六、第六百四十七、第六百四十八、第六百四十九、第六百五十、第六百五十一、第六百五十二、第六百五十三、第六百五十四、第六百五十五、第六百五十六、第六百五十七、第六百五十八、第六百五十九、第六百六十、第六百六十一、第六百六十二、第六百六十三、第六百六十四、第六百六十五、第六百六十六、第六百六十七、第六百六十八、第六百六十九、第六百七十、第六百七十一、第六百七十二、第六百七十三、第六百七十四、第六百七十五、第六百七十六、第六百七十七、第六百七十八、第六百七十九、第六百八十、第六百八十一、第六百八十二、第六百八十三、第六百八十四、第六百八十五、第六百八十六、第六百八十七、第六百八十八、第六百八十九、第六百九十、第六百九十一、第六百九十二、第六百九十三、第六百九十四、第六百九十五、第六百九十六、第六百九十七、第六百九十八、第六百九十九、第七百、第七百一、第七百二、第七百三、第七百四、第七百五、第七百六、第七百七、第七百八、第七百九、第七百十、第七百十一、第七百十二、第七百十三、第七百十四、第七百十五、第七百十六、第七百十七、第七百十八、第七百十九、第七百二十、第七百二十一、第七百二十二、第七百二十三、第七百二十四、第七百二十五、第七百二十六、第七百二十七、第七百二十八、第七百二十九、第七百三十、第七百三十一、第七百三十二、第七百三十三、第七百三十四、第七百三十五、第七百三十六、第七百三十七、第七百三十八、第七百三十九、第七百四十、第七百四十一、第七百四十二、第七百四十三、第七百四十四、第七百四十五、第七百四十六、第七百四十七、第七百四十八、第七百四十九、第七百五十、第七百五十一、第七百五十二、第七百五十三、第七百五十四、第七百五十五、第七百五十六、第七百五十七、第七百五十八、第七百五十九、第七百六十、第七百六十一、第七百六十二、第七百六十三、第七百六十四、第七百六十五、第七百六十六、第七百六十七、第七百六十八、第七百六十九、第七百七十、第七百七十一、第七百七十二、第七百七十三、第七百七十四、第七百七十五、第七百七十六、第七百七十七、第七百七十八、第七百七十九、第七百八十、第七百八十一、第七百八十二、第七百八十三、第七百八十四、第七百八十五、第七百八十六、第七百八十七、第七百八十八、第七百八十九、第七百九十、第七百九十一、第七百九十二、第七百九十三、第七百九十四、第七百九十五、第七百九十六、第七百九十七、第七百九十八、第七百九十九、第八百、第八百一、第八百二、第八百三、第八百四、第八百五、第八百六、第八百七、第八百八、第八百九、第八百十、第八百十一、第八百十二、第八百十三、第八百十四、第八百十五、第八百十六、第八百十七、第八百十八、第八百十九、第八百二十、第八百二十一、第八百二十二、第八百二十三、第八百二十四、第八百二十五、第八百二十六、第八百二十七、第八百二十八、第八百二十九、第八百三十、第八百三十一、第八百三十二、第八百三十三、第八百三十四、第八百三十五、第八百三十六、第八百三十七、第八百三十八、第八百三十九、第八百四十、第八百四十一、第八百四十二、第八百四十三、第八百四十四、第八百四十五、第八百四十六、第八百四十七、第八百四十八、第八百四十九、第八百五十、第八百五十一、第八百五十二、第八百五十三、第八百五十四、第八百五十五、第八百五十六、第八百五十七、第八百五十八、第八百五十九、第八百六十、第八百六十一、第八百六十二、第八百六十三、第八百六十四、第八百六十五、第八百六十六、第八百六十七、第八百六十八、第八百六十九、第八百七十、第八百七十一、第八百七十二、第八百七十三、第八百七十四、第八百七十五、第八百七十六、第八百七十七、第八百七十八、第八百七十九、第八百八十、第八百八十一、第八百八十二、第八百八十三、第八百八十四、第八百八十五、第八百八十六、第八百八十七、第八百八十八、第八百八十九、第八百九十、第八百九十一、第八百九十二、第八百九十三、第八百九十四、第八百九十五、第八百九十六、第八百九十七、第八百九十八、第八百九十九、第九百、第九百一、第九百二、第九百三、第九百四、第九百五、第九百六、第九百七、第九百八、第九百九、第九百十、第九百十一、第九百十二、第九百十三、第九百十四、第九百十五、第九百十六、第九百十七、第九百十八、第九百十九、第九百二十、第九百二十一、第九百二十二、第九百二十三、第九百二十四、第九百二十五、第九百二十六、第九百二十七、第九百二十八、第九百二十九、第九百三十、第九百三十一、第九百三十二、第九百三十三、第九百三十四、第九百三十五、第九百三十六、第九百三十七、第九百三十八、第九百三十九、第九百四十、第九百四十一、第九百四十二、第九百四十三、第九百四十四、第九百四十五、第九百四十六、第九百四十七、第九百四十八、第九百四十九、第九百五十、第九百五十一、第九百五十二、第九百五十三、第九百五十四、第九百五十五、第九百五十六、第九百五十七、第九百五十八、第九百五十九、第九百六十、第九百六十一、第九百六十二、第九百六十三、第九百六十四、第九百六十五、第九百六十六、第九百六十七、第九百六十八、第九百六十九、第九百七十、第九百七十一、第九百七十二、第九百七十三、第九百七十四、第九百七十五、第九百七十六、第九百七十七、第九百七十八、第九百七十九、第九百八十、第九百八十一、第九百八十二、第九百八十三、第九百八十四、第九百八十五、第九百八十六、第九百八十七、第九百八十八、第九百八十九、第九百九十、第九百九十一、第九百九十二、第九百九十三、第九百九十四、第九百九十五、第九百九十六、第九百九十七、第九百九十八、第九百九十九、第千百、第千百一、第千百二、第千百三、第千百四、第千百五、第千百六、第千百七、第千百八、第千百九、第千百十、第千百十一、第千百十二、第千百十三、第千百十四、第千百十五、第千百十六、第千百十七、第千百十八、第千百十九、第千百二十、第千百二十一、第千百二十二、第千百二十三、第千百二十四、第千百二十五、第千百二十六、第千百二十七、第千百二十八、第千百二十九、第千百三十、第千百三十一、第千百三十二、第千百三十三、第千百三十四、第千百三十五、第千百三十六、第千百三十七、第千百三十八、第千百三十九、第千百四十、第千百四十一、第千百四十二、第千百四十三、第千百四十四、第千百四十五、第千百四十六、第千百四十七、第千百四十八、第千百四十九、第千百五十、第千百五十一、第千百五十二、第千百五十三、第千百五十四、第千百五十五、第千百五十六、第千百五十七、第千百五十八、第千百五十九、第千百六十、第千百六十一、第千百六十二、第千百六十三、第千百六十四、第千百六十五、第千百六十六、第千百六十七、第千百六十八、第千百六十九、第千百七十、第千百七十一、第千百七十二、第千百七十三、第千百七十四、第千百七十五、第千百七十六、第千百七十七、第千百七十八、第千百七十九、第千百八十、第千百八十一、第千百八十二、第千百八十三、第千百八十四、第千百八十五、第千百八十六、第千百八十七、第千百八十八、第千百八十九、第千百九十、第千百九十一、第千百九十二、第千百九十三、第千百九十四、第千百九十五、第千百九十六、第千百九十七、第千百九十八、第千百九十九、第二千百、第二千百一、第二千百二、第二千百三、第二千百四、第二千百五、第二千百六、第二千百七、第二千百八、第二千百九、第二千百十、第二千百十一、第二千百十二、第二千百十三、第二千百十四、第二千百十五、第二千百十六、第二千百十七、第二千百十八、第二千百十九、第二千百二十、第二千百二十一、第二千百二十二、第二千百二十三、第二千百二十四、第二千百二十五、第二千百二十六、第二千百二十七、第二千百二十八、第二千百二十九、第二千百三十、第二千百三十一、第二千百三十二、第二千百三十三、第二千百三十四、第二千百三十五、第二千百三十六、第二千百三十七、第二千百三十八、第二千百三十九、第二千百四十、第二千百四十一、第二千百四十二、第二千百四十三、第二千百四十四、第二千百四十五、第二千百四十六、第二千百四十七、第二千百四十八、第二千百四十九、第二千百五十、第二千百五十一、第二千百五十二、第二千百五十三、第二千百五十四、第二千百五十五、第二千百五十六、第二千百五十七、第二千百五十八、第二千百五十九、第二千百六十、第二千百六十一、第二千百六十二、第二千百六十三、第二千百六十四、第二千百六十五、第二千百六十六、第二千百六十七、第二千百六十八、第二千百六十九、第二千百七十、第二千百七十一、第二千百七十二、第二千百七十三、第二千百七十四、第二千百七十五、第二千百七十六、第二千百七十七、第二千百七十八、第二千百七十九、第二千百八十、第二千百八十一、第二千百八十二、第二千百八十三、第二千百八十四、第二千百八十五、第二千百八十六、第二千百八十七、第二千百八十八、第二千百八十九、第二千百九十、第二千百九十一、第二千百九十二、第二千百九十三、第二千百九十四、第二千百九十五、第二千百九十六、第二千百九十七、第二千百九十八、第二千百九十九、第三千百、第三千百一、第三千百二、第三千百三、第三千百四、第三千百五、第三千百六、第三千百七、第三千百八、第三千百九、第三千百十、第三千百十一、第三千百十二、第三千百十三、第三千百十四、第三千百十五、第三千百十六、第三千百十七、第三千百十八、第三千百十九、第三千百二十、第三千百二十一、第三千百二十二、第三千百二十三、第三千百二十四、第三千百二十五、第三千百二十六、第三千百二十七、第三千百二十八、第三千百二十九、第三千百三十、第三千百三十一、第三千百三十二、第三千百三十三、第三千百三十四、第三千百三十五、第三千百三十六、第三千百三十七、第三千百三十八、第三千百三十九、第三千百四十、第三千百四十一、第三千百四十二、第三千百四十三、第三千百四十四、第三千百四十五、第三千百四十六、第三千百四十七、第三千百四十八、第三千百四十九、第三千百五十、第三千百五十一、第三千百五十二、第三千百五十三、第三千百五十四、第三千百五十五、第三千百五十六、第三千百五十七、第三千百五十八、第三千百五十九、第三千百六十、第三千百六十一、第三千百六十二、第三千百六十三、第三千百六十四、第三千百六十五、第三千百六十六、第三千百六十七、第三千百六十八、第三千百六十九、第三千百七十、第三千百七十一、第三千百七十二、第三千百七十三、第三千百七十四、第三千百七十五、第三千百七十六、第三千百七十七、第三千百七十八、第三千百七十九、第三千百八十、第三千百八十一、第三千百八十二、第三千百八十三、第三千百八十四、第三千百八十五、第三千百八十六、第三千百八十七、第三千百八十八、第三千百八十九、第三千百九十、第三千百九十一、第三千百九十二、第三千百九十三、第三千百九十四、第三千百九十五、第三千百九十六、第三千百九十七、第三千百九十八、第三千百九十九、第四千百、第四千百一、第四千百二、第四千百三、第四千百四、第四千百五、第四千百六、第四千百七、第四千百八、第四千百九、第四千百十、第四千百十一、第四千百十二、第四千百十三、第四千百十四、第四千百十五、第四千百十六、第四千百十七、第四千百十八、第四千百十九、第四千百二十、第四千百二十一、第四千百二十二、第四千百二十三、第四千百二十四、第四千百二十五、第四千百二十六、第四千百二十七、第四千百二十八、第四千百二十九、第四千百三十、第四千百三十一、第四千百三十二、第四千百三十三、第四千百三十四、第四千百三十五、第四千百三十六、第四千百三十七、第四千百三十八、第四千百三十九、第四千百四十、第四千百四十一、第四千百四十二、第四千百四十三、第四千百四十四、第四千百四十五、第四千百四十六、第四千百四十七、第四千百四十八、第四千百四十九、第四千百五十、第四千百五十一、第四千百五十二、第四千百五十三、第四千百五十四、第四千百五十五、第四千百五十六、第四千百五十七、第四千百五十八、第四千百五十九、第四千百六十、第四千百六十一、第四千百六十二、第四千百六十三、第四千百六十四、第四千百六十五、第四千百六十六、第四千百六十七、第四千百六十八、第四千百六十九、第四千百七十、第四千百七十一、第四千百七十二、第四千百七十三、第四千百七十四、第四千百七十五、第四千百七十六、第四千百七十七、第四千百七十八、第四千百七十九、第四千百八十、第四千百八十一、第四千百八十二、第四千百八十三、第四千百八十四、第四千百八十五、第四千百八十六、第四千百八十七、第四千百八十八、第四千百八十九、第四千百九十、第四千百九十一、第四千百九十二、第四千百九十三、第四千百九十四、第四千百九十五、第四千百九十六、第四千百九十七、第四千百九十八、第四千百九十九、第五千百、第五千百一、第五千百二、第五千百三、第五千百四、第五千百五、第五千百六、第五千百七、第五千百八、第五千百九、第五千百十、第五千百十一、第五千百十二、第五千百十三、第五千百十四、第五千百十五、第五千百十六、第五千百十七、第五千百十八、第五千百十九、第五千百二十、第五千百二十一、第五千百二十二、第五千百二十三、第五千百二十四、第五千百二十五、第五千百二十六、第五千百二十七、第五千百二十八、第五千百二十九、第五千百三十、第五千百三十一、第五千百三十二、第五千百三十三、第五千百三十四、第五千百三十五、第五千百三十六、第五千百三十七、第五千百三十八、第五千百三十九、第五千百四十、第五千百四十一、第五千百四十二、第五千百四十三、第五千百四十四、第五千百四十五、第五千百四十六、第五千百四十七、第五千百四十八、第五千百四十九、第五千百五十、第五千百五十一、第五千百五十二、第五千百五十三、第五千百五十四、第五千百五十五、第五千百五十六、第五千百五十七、第五千百五十八、第五千百五十九、第五千百六十、第五千百六十一、第五千百六十二、第五千百六十三、第五千百六十四、第五千百六十五、第五千百六十六、第五千百六十七、第五千百六十八、第五千百六十九、第五千百七十、第五千百七十一、第五千百七十二、第五千百七十三、第五千百七十四、第五千百七十五、第五千百七十六、第五千百七十七、第五千百七十八、第五千百七十九、第五千百八十、第五千百八十一、第五千百八十二、第五千百八十三、第五千百八十四、第五千百八十五、第五千百八十六、第五千百八十七、第五千百八十八、第五千百八十九、第五千百九十、第五千百九十一、第五千百九十二、第五千百九十三、第五千百九十四、第五千百九十五、第五千百九十六、第五千百九十七、第五千百九十八、第五千百九十九、第六千百、第六千百一、第六千百二、第六千百三、第六千百四、第六千百五、第六千百六、第六千百七、第六千百八、第六千百九、第六千百十、第六千百十一、第六千百十二、第六千百十三、第六千百十四、第六千百十五、第六千百十六、第六千百十七、第六千百十八、第六千百十九、第六千百二十、第六千百二十一、第六千百二十二、第六千百二十三、第六千百二十四、第六千百二十五、第六千百二十六、第六千百二十七、第六千百二十八、第六千百二十九、第六千百三十、第六千百三十一、第六千百三十二、第六千百三十三、第六千百三十四、第六千百三十五、第六千百三十六、第六千百三十七、第六千百三十八、第六千百三十九、第六千百四十、第六千百四十一、第六千百四十二、第六千百四十三、第六千百四十四、第六千百四十五、第六千百四十六、第六千百四十七、第六千百四十八、第六千百四十九、第六千百五十、第六千百五十一、第六千百五十二、第六千百五十三、第六千百五十四、第六千百五十五、第六千百五十六、第六千百五十七、第六千百五十八、第六千百五十九、第六千百六十、第六千百六十一、第六千百六十二、第六千百六十三、第六千百六十四、第六千百六十五、第六千百六十六、第六千百六十七、第六千百六十八、第六千百六十九、第六千百七十、第六千百七十一、第六千百七十二、第六千百七十三、第六千百七十四、第六千百七十五、第六千百七十六、第六千百七十七、第六千百七十八、第六千百七十九、第六千百八十、第六千百八十一、第六千百八十二、第六千百八十三、第六千百八十四、第六千百八十五、第六千百八十六、第六千百八十七、第六千百八十八、第六千百八十九、第六千百九十、第六千百九十一、第六千百九十二、第六千百九十三、第六千百九十四、第六千百九十五、第六千百九十六、第六千百九十七、第六千百九十八、第六千百九十九、第七千百、第七千百一、第七千百二、第七千百三、第七千百四、第七千百五、第七千百六、第七千百七、第七千百八、第七千百九、第七千百十、第七千百十一、第七千百十二、第七千百十三、第七千百十四、第七千百十五、第七千百十六、第七千百十七、第七千百十八、第七千百十九、第七千百二十、第七千百二十一、第七千百二十二、第七千百二十三、第七千百二十四、第七千百二十五、第七千百二十六、第七千百二十七、第七千百二十八、第七千百二十九、第七千百三十、第七千百三十一、第七千百三十二、第七千百三十三、第七千百三十四、第七千百三十五、第七千百三十六、第七千百三十七、第七千百三十八、第七千百三十九、第七千百四十、第七千百四十一、第七千百四十二、第七千百四十三、第七千百四十四、第七千百四十五、第七千百四十六、第七千百四十七、第七千百四十八、第七千百四十九、第七千百五十、第七千百五十一、第七千百五十二、第七千百五十三、第七千百五十四、第七千百五十五、第七千百五十六、第七千百五十七、第七千百五十八、第七千百五十九、第七千百六十、第七千百六十一、第七千百六十二、第七千百六十三、第七千百六十四、第七千百六十五、第七千百六十六、第七千百六十七、第七千百六十八、第七千百六十九、第七千百七十、第七千百七十一、第七千百七十二、第七千百七十三、第七千百七十四、第七千百七十五、第七千百七十六、第七千百七十七、第七千百七十八、第七千百七十九、第七千百八十、第七千百八十一、第七千百八十二、第七千百八十三、第七千百八十四、第七千百八十五、第七千百八十六、第七千百八十七、第七千百八十八、第七千百八十九、第七千百九十、第七千百九十一、第七千百九十二、第七千百九十三、第七千百九十四、第七千百九十五、第七千百九十六、第七千百九十七、第七千百九十八、第七千百九十九、第八千百、第八千百一、第八千百二、第八千百三、第八千百四、第八千百五、第八千百六、第八千百七、第八千百八、第八千百九、第八千百十、第八千百十一、第八千百十二、第八千百十三、第八千百十四、第八千百十五、第八千百十六、第八千百十七、第八千百十八、第八千百十九、第八千百二十、第八千百二十一、第八千百二十二、第八千百二十三、第八千百二十四、第八千百二十五、第八千百二十六、第八千百二十七、第八千百二十八、第八千百二十九、第八千百三十、第八千百三十一、第八千百三十二、第八千百三十三、第八千百三十四、第八千百三十五、第八千百三十六、第八千百三十七、第八千百三十八、第八千百三十九、第八千百四十、第八千百四十一、第八千百四十二、第八千百四十三、第八千百四十四、第八千百四十五、第八千百四十六、第八千百四十七、第八千百四十八、第八千百四十九、第八千百五十、第八千百五十一、第八千百五十二、第八千百五十三、第八千百五十四、第八千百五十五、第八千百五十六、第八千百五十七、第八千百五十八、第八千百五十九、第八千百六十、第八千百六十一、第八千百六十二、第八千百六十三、第八千百六十四、第八千百六十五、第八千百六十六、第八千百六十七、第八千百六十八、第八千百六十九、第八千百七十、第八千百七十一、第八千百七十二、第八千百七十三、第八千百七十四、第八千百七十五、第八千百七十六、第八千百七十七、第八千百七十八、第八千百七十九、第八千百八十、第八千百八十一、第八千百八十二、第八千百八十三、第八千百八十四、第八千百八十五、第八千百八十六、第八千百八十七、第八千百八十八、第八千百八十九、第八千百九十、第八千百九十一、第八千百九十二、第八千百九十三、第八千百九十四、第八千百九十五、第八千百九十六、第八千百九十七、第八千百九十八、第八千百九十九、第九千百、第九千百一、第九千百二、第九千百三、第九千百四、第九千百五、第九千百六、第九千百七、第九千百八、第九千百九、第九千百十、第九千百十一、第九千百十二、第九千百十三、第九千百十四、第九千百十五、第九千百十六、第九千百十七、第九千百十八、第九千百十九、第九千百二十、第九千百二十一、第九千百二十二、第九千百二十三、第九千百二十四、第九千百二十五、第九千百二十六、第九千百二十七、第九千百二十八、第九千百二十九、第九千百三十、第九千百三十一、第九千百三十二、第九千百三十三、第九千百三十四、第九千百三十五、第九千百三十六、第九千百三十七、第九千百三十八、第九千百三十九、第九千百四十、第九千百四十一、第九千百四十二、第九千百四十三、第九千百四十四、第九千百四十五、第九千百四十六、第九千百四十七、第九千百四十八、第九千百四十九、第九千百五十、第九千百五十一、第九千百五十二、第九千百五十三、第九千百五十四、第九千百五十五、第九千百五十六、第九千百五十七、第九千百五十八、第九千百五十九、第九千百六十、第九千百六十一、第九千百六十二、第九千百六十三、第九千百六十四、第九千百六十五、第九千百六十六、第九千百六十七、第九千百六十八、第九千百六十九、第九千百七十、第九千百七十一、第九千百七十二、第九千百七十三、第九千百七十四、第九千百七十五、第九千百七十六、第九千百七十七、第九千百七十八、第九千百七十九、第九千百八十、第九千百八十一、第九千百八十二、第九千百八十三、第九千百八十四、第九千百八十五、第九千百八十六、第九千百八十七、第九千百八十八、第九千百八十九、第九千百九十、第九千百九十一、第九千百九十二、第九千百九十三、第九千百九十四、第九千百九十五、第九千百九十六、第九千百九十七、第九千百九十八、第九千百九十九、第千百、第千百一、第千百二、第千百三、第千百四、第千百五、第千百六、第千百七、第千百八、第千百九、第千百十、第千百十一、第千百十二、第千百十三、第千百十四、第千百十五、第千百十六、第千百十七、第千百十八、第千百十九、第千百二十、第千百二十一、第千百二十二、第千百二十三、第千百二十四、第千百二十五、第千百二十六、第千百二十七、第千百二十八、第千百二十九、第千百三十、第千百三十一、第千百三十二、第千百三十三、第千百三十四、第千百三十五、第千百三十六、第千百三十七、第千百三十八、第千百三十九、第千百四十、第千百四十一、第千百四十二、第千百四十三、第千百四十四、第千百四十五、第千百四十六、第千百四十七、第千百四十八、第千百四十九、第千百五十、第千百五十一、第千百五十二、第千百五十三、第千百五十四、第千百五十五、第千百五十六、第千百五十七、第千百五十八、第千百五十九、第千百六十、第千百六十一、第千百六十二、第千百六十三、第千百六十四、第千百六十五、第千百六十六、第千百六十七、第千百六十八、第千百六十九、第千百七十、第千百七十一、第千百七十二、第千百七十三、第千百七十四、第千百七十五、第千百七十六、第千百七十七、第千百七十八、第千百七十九、第千百八十、第千百八十一、第千百八十二、第千百八十三、第千百八十四、第千百八十五、第千百八十六、第千百八十七、第千百八十八、第千百八十九、第千百九十、第千百九十一、第千百九十二、第千百九十三、第千百九十四、第千百九十五、第千百九十六、第千百九十七、第千百九十八、第千百九十九、第二千百、第二千百一、第二千百二、第二千百三、第二千百四、第二千百五、第二千百六、第二千百七、第二千百八、第二千百九、第二千百十、第二千百十一、第二千百十二、第二千百十三、第二千百十四、第二千百十五、第二千百十六、第二千百十七、第二千百十八、第二千百十九、第二千百二十、第二千百二十一、第二千百二十二、第二千百二十三、第二千百二十四、第二千百二十五、第二千百二十六、第二千百二十七、第二千百二十八、第二千百二十九、第二千百三十、第二千百三十一、第二千百三十二、第二千百三十三、第二千百三十四、第二千百三十五、第二千百三十六、第二千百三十七、第二千百三十八、第二千百三十九、第二千百四十、第二千百四十一、第二千百四十二、第二千百四十三、第二千百四十四、第二千百四十五、第二千百四十六、第二千百四十七、第二千百四十八、第二千百四十九、第二千百五十、第二千百五十一、第二千百五十二、第二千百五十三、第二千百五十四、第二千百五十五、第二千百五十六、第二千百五十七、第二千百五十八、第二千百五十九、第二千百六十、第二千百六十一、第二千百六十二、第二千百六十三、第二千百六十四、第二千百六十五、第二千百六十六、第二千百六十七、第二千百六十八、第二千百六十九、第二千百七十、第二千百七十一、第二千百七十二、第二千百七十三、第二千百七十四、第二千百七十五、第二千百七十六、第二千百七十七、第二千百七十八、第二千百七十九、第二千百八十、第二千百八十一、第二千百八十二、第二千百八十三、第二千百八十四、第二千百八十五、第二千百八十六、第二千百八十七、第二千百八十八、第二千百八十九、第二千百九十、第二千百九十一、第二千百九十二、第二千百九十三、第二千百九十四、第二千百九十五、第二千百九十六、第二千百九十七、第二千百九十八、第二千百九十九、第三千百、第三千百一、第三千百二、第三千百三、第三千百四、第三千百五、第三千百六、第三千百七、第三千百八、第三千百九、第三千百十、第三千百十一、第三千百十二、第三千百十三、第三千百十四、第三千百十五、第三千百十六、第三千百十七、第三千百十八、第三千百十九、第三千百二十、第三千百二十一、第三千百二十二、第三千百二十三、第三千百二十四、第三千百二十五、第三千百二十六、第三千百二十七、第三千百二十八、第三千百二十九、第三千百三十、第三千百三十一、第三千百三十二、第三千百三十三、第三千百三十四、第三千百三十五、第三千百三十六、第三千百三十七、第三千百三十八、第三千百三十九、第三千百四十、第三千百四十一、第三千百四十二、第三千百四十三、第三千百四十四、第三千百四十五、第三千百四十六、第三千百四十七、第三千百四十八、第三千百四十九、第三千百五十、第三千百五十一、第三千百五十二、第三千百五十三、第三千百五十四、第三千百五十五、第三千百五十六、第三千百五十七、第三

七師団戦記

あゝ沖縄

<70>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

鬼気迫る絶叫

聞くほうの気も狂う

殺してくれ

沖縄戦とその間

6月10日

米軍、八重瀬、与座岳攻撃。

五月四日早前時を期し、陸海軍あげての総攻撃が行なわれる—この情報に、笹島兵長ら第一機関銃中隊（笹中隊）は、必勝の信念をいだいて前進した。

岸中隊は、小さな切り立った岩かげに到着、そこで夜を明かした。夜明るくなったころ、笹島兵長は、陣地を出て岩かげから北の方を見たところ、米軍の大隊を発見、ビックリして、陣地へ走り、機関銃に手をかけた。一番乗りの重辺上等兵（三坪市）が、敵が

ら、もぎとるように機関銃をうばい、門に背負った。あッ—という間もなかった。渡辺上等兵は敵弾の直撃をうけ、銃もろとも

そしているところへ太田宏次郎一等兵（栗沢町）が、はってはいってきた。足首をやられていて

の手リユウ弾を投りしめた。

へいや、いや、そんなことはできない。なんとかして助けてやろう。戦友愛を忘れてはならぬ〉

苦しがって、また、ふたりが絶叫する。ふたたび、ムラムラ…と殺意があたまをもちあげる。

へこのままなら、三人とも敵に発見されるぞ。どう甘助からないんだ…やれ〉

もこっぱみじんに粉砕された。

敵の射撃、爆撃は間もられのよう。有元兵長も、重傷の苦しさにたえきれず

「殺してくれ…殺してくれ…」

太田一等兵が絞りかって叫ぶ。

「ひと思いに殺してくれッ」

有元兵長は、苦しさのあまり、ふたりの手リユウ弾をにぎりしめる。が、どうしても、ピンを抜くことができない。

へかわいそうに、ふたりともはるばる北海道から満州、そして沖縄まで、きた戦友ではないか。きょうがい以上の仲じゃあないか…〉

また、手リユウ弾をにぎりしめたまま、ふたりの絶叫をきいていられる。

「おれが苦しめないでくれ。たのむッ」負傷者は、殺してくれと絶叫するだけで、

へは、どうすればいいんだ…〉

殺してることも、殺すこともできない。耳をふさぎたくなる。

手足を曲きつづけるいま、手がふるえるような思いがいたしました。

先日、広島村の田中松太郎さんが来社し、いま、ここにのべているような状況に出会った時のことを語り、涙で話ができなくなってしまった。

動けない負傷兵のたくさんいるこうへ、暗い眼をした衛生員がはいってきた。衛生員が、どんなことを命ぜられてきたか、田中さんには、わかるのだが、衛生員の行動をとめることができなかった。

「やめろ、やめろ、やれば、あるいは、生きながらえた者は、いたかもしれないのに…」

そう思って、二度、三度、目に力を込めて、こゆ、わきあがる涙を、じっとこらえて、見ている記者も、もらい泣きした。

山間之者のある宇江城のごうのなかの今井実氏

長の声には耳をかさない。ことを逃げ出すことが思いうかぶ。

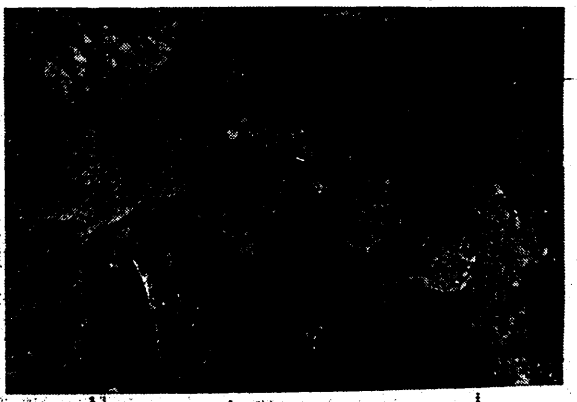
へそれは、殺す以上に残酷だ。そんなことはできない〉

兵長は

「昔時を思い出しながらの

こたまするこのなかで、笹島

うな、うめき、叫び、泣き声のいたが、ついに発狂した。



山三四七五部隊第一大隊第一機関銃中隊の編成（位階・業績さんの調査・敬称略）＝（3）＝

上藤仁（豊浦町字合川一八・五月十四日早良町）松岡茂（和歌山県伊都郡妙寺町字下の町四一四・五月七日戦死）藤田利家（栗沢町美流渡東幌内鉱業所・五月八日戦死）五郎邦良（空知市山島町一九五・五月七日戦死）小熊勝太郎（雨竜郡沼田村字ビハウン・八月十九日戦死）青柳太助（札幌南二条三・五月七日戦死）斜谷高吉（札幌豊平三条九自・九月〇日戦病死）大田正治（札幌南十五西十三・自時場所不明）佐々木忠明（赤平市二〇五・四月二十九日小夜郡）佐々木勝美（美唄市光珠内青外地・四月二十九日小夜郡）広畑時市（中頃町氣長町二一六・六月二十七日尾張）茂庭勝美（赤平市茂尻旭町・六月二十七日尾張）鈴木重雄（沙流郡日高町一六五・五月二十日戦死）鈴木勝雄（中頃町三条四丁目・五月二十日・四〇高地）佐藤邦夫（紋別郡興浦町字幌見町八・五月七日戦死）静川松雄（厚田村望来一〇五・六月二十九日雨死）三浦繁（三笠市外幌内・六月十七日国内）

顔写真提供＝山三四七部隊第一大隊長久保田治郎（札幌市・月寒）

七師団戦記

あゝ沖縄

<71>

戦没一万八千五柱の霊にささぐ

五月一日。山三四七五部隊第二大隊（長・志村常夫少佐）第七中隊（長・太田中尉）に出撃命令が下った。太田中隊は、喜屋武に近い南部の山城部落（やまぐすく）に駐とんしていた。

夜七時、中隊の第三小隊（長・佐藤伍長）の隊員一団は、ごう内に集合、小隊長から緊張した口調で命令を伝達された。きょうか、あすかと、米軍上陸以来一カ月間、待日続きになっていた出撃命令を伝えられると、兵隊は、声もなくがっくりした。

仲間の地酒泡盛（あわもり）が、各兵の前にコップにつがれる。灯油の薄くらい明りのなかで、出陣の祝い酒・泡盛をのんで、無明酒。どこからともなく流しこむ。口からのど、胃にかけてしみるような酒のほてり。生まれてはじめて、戦闘をぬって続けられ、小休止ともなれば、ところかまわず腰をおろして休んだ。しきりに砲弾がサク裂する。さいわい死傷者は出なかった。

行軍は、夜間しかできない。屋は穴にはいってかくれ、夕やみを待って行軍した。山城部落をでて、三日目（五月三日）に百里に到着した。まちは砲弾ですっかり破壊されていた。さらに四キロ北上して陣地を命ぜられた。ここが、前田高地だという。

すぐ、戦闘態勢にはいるため、軽装を命ぜられた。軍靴を地下ケンにぬぎかえる。残のうに戦パンと弾薬をつめた。帯革（バンド）に手リュウ弾をしばりつける。

荷物が重く、肩にめり込む。軍装をととのえている間じゅう、砲弾のたえまないサク裂。そう、カサ、カサ……シュル、シュル……と頭上に、きき慣れぬ物音がしていた。風か、クマザサを吹きわたるような音。それが頭上を越え、後方でエンジンでもたたきわるような大きな音やひびかせる。これが、米軍の迫撃砲の飛びさる音と、サク裂する音であることを、第三小隊長が知ったのは、翌日夜戦場になれてからだった。

日本軍は、米軍の重砲と戦車と、この迫撃砲には、最初から悩まされた。

砲弾は、最後まで鳴まされた。

午前零時ごろ、火をかくしてたばこをすうことをゆるされた。

「別れの水」

夜七時、中隊の第三小隊（長・佐藤伍長）の隊員一団は、こう内に集合、小隊長から緊張した口調で命令を伝達された。きょうか、あすかと、米軍上陸以来一カ月間、待日続きになっていた出撃命令を伝えられると、兵隊は、声もなくがっくりした。

仲間の地酒泡盛（あわもり）が、各兵の前にコップにつがれる。灯油の薄くらい明りのなかで、出陣の祝い酒・泡盛をのんで、無明酒。どこからともなく流しこむ。口からのど、胃にかけてしみるような酒のほてり。生まれてはじめて、戦闘をぬって続けられ、小休止ともなれば、ところかまわず腰をおろして休んだ。しきりに砲弾がサク裂する。さいわい死傷者は出なかった。

行軍は、夜間しかできない。屋は穴にはいってかくれ、夕やみを待って行軍した。山城部落をでて、三日目（五月三日）に百里に到着した。まちは砲弾ですっかり破壊されていた。さらに四キロ北上して陣地を命ぜられた。ここが、前田高地という。

すぐ、戦闘態勢にはいるため、軽装を命ぜられた。軍靴を地下ケンにぬぎかえる。残のうに戦パンと弾薬をつめた。帯革（バンド）に手リュウ弾をしばりつける。

荷物が重く、肩にめり込む。軍装をととのえている間じゅう、砲弾のたえまないサク裂。そう、カサ、カサ……シュル、シュル……と頭上に、きき慣れぬ物音がしていた。風か、クマザサを吹きわたるような音。それが頭上を越え、後方でエンジンでもたたきわるような大きな音やひびかせる。これが、米軍の迫撃砲の飛びさる音と、サク裂する音であることを、第三小隊長が知ったのは、翌日夜戦場になれてからだった。

日本軍は、米軍の重砲と戦車と、この迫撃砲には、最初から悩まされた。

砲弾は、最後まで鳴まされた。

午前零時ごろ、火をかくしてたばこをすうことをゆるされた。

「小隊長殿が、やられたッ！」

だれかが叫ぶ。

左となりでは軍上等兵が軍機で応戦。三回ほど発射したとき、その何十倍もの猛烈な敵弾が飛んできた。

軍上等兵と前田上等兵（衛生兵）が目の前で戦死。

軍原兵長は、敵弾のあい間をみはからい、五尺ほどはっく前進し、水田のアゼにかくれた。照明弾は昼のように明るい。真っ赤になって発光弾が飛んでくる。

「敵は、すぐ目前だな？」

今。

「アゼも、敵に狙はされてしまうかもしれない？」敵弾が激しく、死の不安におそわれる。

軍原兵長は、たばこをふかしながら、これからの戦闘を兵隊に指令を発することになり、中隊、兵隊は身動きできなかった。

第三小隊は、沢をくだって敵まで、たびくらくなり、行動開始の命令。

「アゼを、敵に狙はされてしまうかもしれない？」敵弾が激しく、死の不安におそわれる。

軍原兵長は、たばこをふかしながら、これからの戦闘を兵隊に指令を発することになり、中隊、兵隊は身動きできなかった。

照明弾が上がった。昼のように明るい。全員思わず腰のよこに地に伏せる。やがて、よたよたと射撃をうけた。全員、無我夢中で応戦。軍原兵長は、自分の右側十けたほどはなれて石垣上等兵（宮小牧）が築山に銃機関銃を構えちまくっているのを見た。

「小隊長殿が、やられたッ！」

だれかが叫ぶ。

左となりでは軍上等兵が軽機で応戦。三回ほど発射したとき、その何十倍もの猛烈な敵弾が飛んできた。

軍上等兵と前田上等兵（衛生兵）が目の前で戦死。

軍原兵長は、敵弾のあい間をみはからい、五尺ほどはっく前進し、水田のアゼにかくれた。照明弾は昼のように明るい。真っ赤になって発光弾が飛んでくる。

「敵は、すぐ目前だな？」

今。

「アゼを、敵に狙はされてしまうかもしれない？」敵弾が激しく、死の不安におそわれる。

軍原兵長は、たばこをふかしながら、これからの戦闘を兵隊に指令を発することになり、中隊、兵隊は身動きできなかった。

第三小隊は、沢をくだって敵まで、たびくらくなり、行動開始の命令。

「アゼを、敵に狙はされてしまうかもしれない？」敵弾が激しく、死の不安におそわれる。

軍原兵長は、たばこをふかしながら、これからの戦闘を兵隊に指令を発することになり、中隊、兵隊は身動きできなかった。

照明弾が上がった。昼のように明るい。全員思わず腰のよこに地に伏せる。やがて、よたよたと射撃をうけた。全員、無我夢中で応戦。軍原兵長は、自分の右側十けたほどはなれて石垣上等兵（宮小牧）が築山に銃機関銃を構えちまくっているのを見た。

「小隊長殿が、やられたッ！」

だれかが叫ぶ。

左となりでは軍上等兵が軽機で応戦。三回ほど発射したとき、その何十倍もの猛烈な敵弾が飛んできた。

軍上等兵と前田上等兵（衛生兵）が目の前で戦死。

軍原兵長は、敵弾のあい間をみはからい、五尺ほどはっく前進し、水田のアゼにかくれた。照明弾は昼のように明るい。真っ赤になって発光弾が飛んでくる。

「敵は、すぐ目前だな？」

今。

「アゼを、敵に狙はされてしまうかもしれない？」敵弾が激しく、死の不安におそわれる。

軍原兵長は、たばこをふかしながら、これからの戦闘を兵隊に指令を発することになり、中隊、兵隊は身動きできなかった。

腹にしみる泡盛

80人中、生還は8人

空と海と陸から攻撃をうける日本軍陣地＝米軍軍機撮影提供＝沖縄戦争記録写真提供

前進しようとして、敵の頭上に出したとたん、ボロリと、銃をとり落とした。右腕がしびれて痛い。見ると、右前腕がやられている。前進を思いとまり、その場に伏せた。

後方から、後退せーと叫ぶ声。兵長は、左手に銃を持ち、夢中で走り、砲弾の火にすべり込んだ。穴の中に軍部軍曹（室蘭市関通町）が、右手で水筒をつかんで死んでいた。軍原兵長は、軍部軍曹の水筒をとり、せんを抜いて軍曹の口にあてがった。

「軍曹殿、お別れの水です。」

兵長は軍曹のめい福を祈り、たくさん飲んでください」

最初の出発地点へかけ戻った。

この戦闘は、ほんの四十分間くらいのものだった。ところが、太田中隊長はじめ戦死者は多数にのぼり、隊員八十人の第三小隊の生存者が八人というありさまだった。第二小隊の鶴川上等兵（衛生兵）は、軍靴を口にくわえ、銃を部やられ、血だらけの顔で帰ってきた。

問もなく、敵の射撃がやんだ。「戦友たちはどうなったろう？」

前進しようとして、敵の頭上に出したとたん、ボロリと、銃をとり落とした。右腕がしびれて痛い。見ると、右前腕がやられている。前進を思いとまり、その場に伏せた。

後方から、後退せーと叫ぶ声。兵長は、左手に銃を持ち、夢中で走り、砲弾の火にすべり込んだ。穴の中に軍部軍曹（室蘭市関通町）が、右手で水筒をつかんで死んでいた。軍原兵長は、軍部軍曹の水筒をとり、せんを抜いて軍曹の口にあてがった。

「軍曹殿、お別れの水です。たくさん飲んでください」

兵長は軍曹のめい福を祈り、最初の出発地点へかけ戻った。

この戦闘は、ほんの四十分間くらいのものだった。ところが、太田中隊長はじめ戦死者は多数にのぼり、隊員八十人の第三小隊の生存者が八人というありさまだった。第二小隊の鶴川上等兵（衛生兵）は、軍靴を口にくわえ、銃を部やられ、血だらけの顔で帰ってきた。

沖縄戦士たちの面

6月11日

バックナー米司令官、日本軍司令官に降伏停戦代表を要求。

訂正　山三四師団司令部本間晋久夫軍曹を本人・本間恭子さん（札幌市・月寒）

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

米軍に命中せず

あわてて変合を失念

装薬変合

山三四七五歩兵第二大隊（長・志村保夫少佐）の第一歩兵砲小隊（長・日景正大中尉）は五月一日未明、弁慶の水田の中を通って、第一線の前田一四六高地にひかった。

間道沿があるく、隊員が散散に発し、前進は困難を極めた。

一四六高地は南下する米軍を迎撃する第一線地で、敵陣地に回したほうが、有利な地形になっている。敵戦車は近寄ることが出来ず、日本軍が

沖縄戦七日の間

6月12日

小隊の日本軍軍隊長、米軍と戦

「いま、われ敵戦車は全滅の覚悟に迫いとまれる。」

ない。

大隊長から、歩兵砲小隊の全部は、山頂の陣地につくよう命令された。歩兵砲は、高地の下に位置して、山頂の友軍をそんけ

歩兵砲小隊は、日景小隊長以下、曹長、軍曹二名、兵隊の全員が、前進を開始した。

歩兵砲は、高地の下に位置して、山頂の友軍をそんけ

ら第一目で敵状を偵察してきた。

前進は、敵戦車の砲撃のなかを、前田部落から第一線部落に

歩兵砲小隊は、人員点呼を行なった。吉田兵長大隊兵長、石丸伍

長、大隊田兵長、伍長長谷上等兵

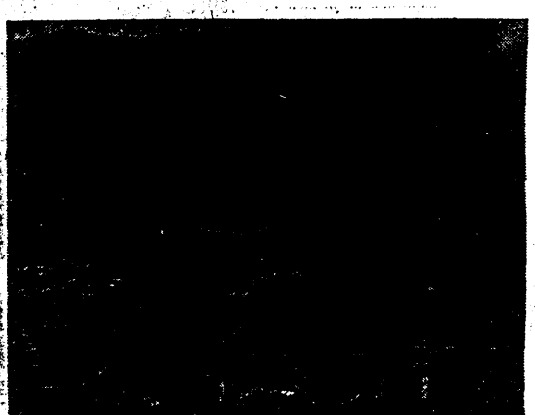
みんなは、兵長の死をおしんだ。石丸伍長、佐藤上等兵の戦死も推定された。

砲撃開始は、二日未明、大隊副官庄子少尉が、山頂から命令

つぎつぎに戦死、砲手長の兵隊が、観測班のところへ走ってきた。

「おいノなにか、まちがえていないか？」クマが早くへ飛びす

や、調べるのをおわったのち、兵長は、ごう内に意識を集中、さっそく装薬の変合をしておして、砲撃を送り出した。



米軍軍艦砲撃の模様

第二歩兵隊小隊名簿

（無線通信士の調査・敬称略）

砲撃手＝小隊長 日景正大中尉（東京）

観測手＝曹長 長谷八郎軍曹（新潟町千歳正夫上等兵（宮城市見附）

吉田兵長（宮城市上町）

（宮城市上町）

（宮城市上町）

あゝ沖縄

戦没一万八千五百柱の霊にささぐ

米軍は、日本軍が大砲やラッキョウ弾薬を撃つと、すぐ発射する。そのあとに、かならず爆弾をたいてゆく。これを日本軍が深追いすると、伏兵がかけて敵の迫撃砲が飛んでくるし、上空で見ていると、敵の戦闘機が飛んでくる米軍機の爆撃をうける。迫撃は来なかった。

切り込み

我が小隊では、負傷者が続出、どうのなかに切り込んだわけで、手当てもできない。原隊の戦闘は、戦死者を出さない戦闘だった。

沖縄戦・ある日

6月14日（午前一時、大石中尉少将以下本部位置）
日本軍の最後的抵抗をはじめる。

ので、夜間、切り込みにゆくが、無事に帰る者は少なかった。切り込みで、吉福伍長（三笠市幌内）佐藤金助上等兵（空知）が戦死した。

えい光弾さく裂

不意をつき 敵機関銃の猛射

このときの状況を山田七五郎上等兵（三笠市清住町）の手記によってつづる。

五月二日、前田高地のこう内で、日暮れ後から切り込みの命令をうけた。二人一組である。佐藤良治上等兵は岡部正雄上等兵と組んだ。富樫伍長、伊藤金助上等兵が一組。状況として一日夜、第七中隊（兵庫・大阪人）が、前田高地の西側の稜線を三正上等兵は、二日夜（五月四日）前田高地のこう内、馬のり攻撃をうけた敵、陣地奪回としてこうから飛び出し、迫撃砲弾で戦死した。

死人に口なしだが、佐藤兵長をみると、戦死者は、死の状況を家族に知らせたい！思い残いだきながら死んでいることがうかがえる。

四人の切り込み隊員が前に、日暮小隊長は

「おまえたちは、戦死するぱい、ご奉公ではない。敵陣地に行いることがわりだと思ったら帰ってこい。なにもあせるな」

佐藤良治さんは、いま、「隊長のあの時の訓示は、自分の部下を、むだには殺したくない、という気持ちだったと思う」と述べている。

四人は防音のため、地下タビ、ゴム長靴をはき、帯剣を腰にさした。そこに小さなこうがあったので、そこに入り、大場中隊の高地奪取のため、一発を投げいたのが、大場中隊の高地奪取のため、一発を投げいたのが、大場中隊の高地奪取のため、一発を投げいたのが

七師団戦記

あゝ沖縄

<74>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

全弾撃ちつくす

期待のえんご砲撃もなく

十数人の志村大隊

沖縄戦だより

6月15日

海 米軍、八重瀬岳に前

五月三日、第一線に対し、最後の攻撃が行なわれるという情報が、前田一四六高地で奮戦中の志村大隊（七五師団第二大隊）にはいった。兵隊は生気をとりもどし、戦闘を中断して、いまかいまかと友軍砲撃の援護を待った。真夜のあるサク裂音が、一発、二発！敵方向からひびいてきた。四、五発つづきビクッとやんだ。耳をすます隊の間に不審のかけがうかぶ。

「どうしたんだろう？」

「おかしいなあ…」

そのうち、真夜のサク裂音はそうとだえてしまった。兵隊は元気がなくなった。上空には、きょうも、友軍機は一機もいない。

部隊本部からの命令。陣地北方の米軍は、戦車を先頭に、火炎放射器で一面を焼きはらいながら進入してくる。戦車のかげには、米歩兵がつづく。タコツボ内の戦車傷害攻撃班も、これ

米軍機がわがもの顔にお宮を続行している。

突然、日原歩兵砲小隊は、背後から敵の砲撃をうけた。米軍は、一四六高地の北方にいるものとばかり思いこんでいた小隊員は、あわて、とまどい、戦闘がわからなくなってしまった。

「志村大隊は、一四六高地を死守せよ」

米軍は、日本軍陣地の五十メートルくらいまで迫ってきて、手りゅう弾を投げこむ。数秒のすきまじい手りゅう弾戦がつづく。

重機関銃射手も、つぎつぎに戦死傷者がでた。こちらのなかは第二大隊の負傷者で満員。負傷者が負をひきとると、そのうえに、みるみるうちに、米軍は、一四六高地頂上に迫った。歩兵砲手も撃ちまくっていた斎藤正夫上等兵が重傷をおう。

「水…水をくれ…」

叫びつづけるが、水がない。かわりの兵が砲側につく。たちまち戦死。つぎの兵も。そのつぎも…砲側が死体でうずまさは、つぎの戦死者や負傷兵の面には、わき水のように一面に負傷者から流れ出た血がたまっている。

× × ×

三十人ほどが小隊長指揮のもとに、とうを出てゆくのを、左腕を負傷し、からだにしばりつけた負傷兵長と負傷兵が見送った。

日本軍陣地へ迫る米軍（米陸軍海兵隊司令部提供）

日がくれた。日原小隊長は小隊最後の突撃を敢行するようにいう。歌える者に集合がかかった。神調出身の初年兵もまじえた。

一四六高地でのような戦闘は、いまで、無傷の者は十数人になっていた。そのなかから谷崎兵長（奈井江）佐々木栄兵長（下浦別）が伝令にえらばれ部隊本部へ走った。

顔手 山兵団司令部故本間喜久夫責任者七人・本間喜子さん（札幌市・月寒）

戦友西田伝太郎兵長のかたきをとる！と絶叫、手りゅう弾を投げていたが、敵の手りゅう弾で戦死。

高橋誠上等兵（札幌）は、頭に手りゅう弾の破片をうけ、全身血まみれになって、ごろごろ転ってきた。軍医長が血をふいてみると、前頭部に、穴があき血がふきでている。カンパンのあき袋数枚をまるめて穴に押しこみ、包帯をした。日原小隊長は、銃剣で戦兵とわたりあい、金身に六発の敵弾をうけて戻ってきた。ほかに負傷者は佐藤長雄上等兵（釧路市・金物商）久保田雄一等兵（函館市）長谷川（小樽）＝指揮班の中隊で、三月二十七日以来、無言長と伝令の任務についていた。手りゅう弾で戦死。

林四郎伝長（滝川）＝鳥居兵長（函館）に重傷をうけ、

宮野光雄上等兵（美幌町）

土屋社宅・斎藤二郎（函館）が、

とう内に運びいれたが戦死。

中村信雄長（芦別）

戦友西田伝太郎兵長のかたきをとる！と絶叫、手りゅう弾を投げていたが、敵の手りゅう弾で戦死。

高橋誠上等兵（札幌）は、頭に手りゅう弾の破片をうけ、全身血まみれになって、ごろごろ転ってきた。軍医長が血をふいてみると、前頭部に、穴があき血がふきでている。カンパンのあき袋数枚をまるめて穴に押しこみ、包帯をした。日原小隊長は、銃剣で戦兵とわたりあい、金身に六発の敵弾をうけて戻ってきた。ほかに負傷者は佐藤長雄上等兵（釧路市・金物商）久保田雄一等兵（函館市）長谷川（小樽）＝指揮班の中隊で、三月二十七日以来、無言長と伝令の任務についていた。手りゅう弾で戦死。

林四郎伝長（滝川）＝鳥居兵長（函館）に重傷をうけ、

宮野光雄上等兵（美幌町）

土屋社宅・斎藤二郎（函館）が、

とう内に運びいれたが戦死。

中村信雄長（芦別）

宮辺久雄長（釧路）＝どんな重傷にあっても、死なない、みんなを笑わせていた。手りゅう弾で戦死。

笹島公雄軍曹（小樽）＝指揮班の中隊で、三月二十七日以来、無言長と伝令の任務についていた。手りゅう弾で戦死。

林四郎伝長（滝川）＝鳥居兵長（函館）に重傷をうけ、

宮野光雄上等兵（美幌町）

土屋社宅・斎藤二郎（函館）が、

とう内に運びいれたが戦死。

中村信雄長（芦別）

七師団戦記

あゝ沖縄

<75>

戦没一万八千五百の霊にささぐ

米軍機からみた戦闘状況は！！

上陸した米第十軍（司令官サイモン・ボリバー・バックナー中将）のうち第六マリン師団（長・L・O・シェファード少将）（第二万四千三百五十六人）は、沖縄本島北部山岳地帯へ進んだ。敵軍は、これを迎撃するべく、本土決戦のための日本軍の道上陸を考えて、のものだった。

本部半島（もとと）西海岸上陸式の伊江島（四月十六日、米陸軍第七十七師団（長・A・D・ブルース少将）第二万二千人）が飛行場（点線の目的で上陸、十八日、米従軍記者アーニー・パイル氏が戦死）

火炎放射

日本陣地を焼く

四月十九日はじめて使用

団である。米第二十四軍団（長・ホッジ少将）指揮下の米第七師団（長・A・V・アーノルド少将）、同じく第九十六師団（長・J・C・ブラドリイ少将）第十軍直轄の海兵隊、陸軍第二十七師団（長・C・W・クリナー少将）この総員六万六千人（一個師団二万二千人）が、七機、岩山地帯の陣地には百八機、盲腸には百三十九機、その他百四十六機の合計五百六十機、米陸軍二千米国長ホッジ少将は考え、四月十日米、伊上陸やナパーム弾を投下、機銃掃射を浴びせた。巨木はさけ、岩山はくさけ、あらゆるものが焼えあがる。

海上からは戦艦、巡洋艦、駆逐艦各六隻の艦砲射撃がつづく。さらに、六時ちょうどに、米第二十四軍団と第四海兵二十七師団の百五ポ砲から八対曲射砲三百三十四門の砲口が、一斉に開いた。

こう砲は一千の砲が一時に発射したよう。鳴りゆうとろき大地は振動しつづけた。計算上は平均一・五ポごとに七十五門からの砲弾が発射した。この砲撃前十分や間隔をあけず、時間どおりに第一次総攻撃が開始された。

朝霧が、ぬぐうように消え、地表が赤土と緑色のまだらになって浮びあがる。空襲がはじまった。今度は米軍機六十機、第二波、第三波と、四百五十機方の陣地に対して、空襲をはじめた。

午前六時三十分、ふたたび、米砲兵隊は、日本軍の前線を乱れたため、十分間つづけさまに砲撃。合計四十分間の砲撃で米砲兵隊は、一万九千発の砲弾を日本軍の前線に撃ちこんだ。

午前六時四十分、前線に対する砲撃を中止し、後方陽撃を砲撃。米歩兵部隊は、進撃をはじめた。たゞ、日本軍は、大量の地雷を埋め、陣地は破壊され、

ところが、この手前は、みごとに裏切られた。日本軍は、陣地、盲腸、陽線に、いさぎよくひとそう、激しい爆撃をあびせた。

わが山兵団が守備する嘉手納をめざして進撃してきたのが米兵隊七師団であった。米第第六師団は、中部戦線にまとまれ、中部戦線で、合計四十分間の砲撃で米砲兵隊は、一万九千発の砲弾を日本軍の前線に撃ちこんだ。

七師団戦記

あゝ沖縄

<76>

戦没一万八千五百の霊にささぐ

日本軍の地下陣地

知花嶺線につづくスロープを登って行った米軍は、四月五十日以来連日、日本軍から一発の射撃もうけなかった。ところが、きのう夜、前川武雄地帯に一歩足をふみ入れるやいなや、日本軍は一斉に猛射した。前進をストップ、たちまち死傷、戦闘員におよび、遂に午後四時三十分、米軍は後退した。米軍三大隊は、百人ちかい死傷者をだし、うち十三人が戦死した。

沖縄戦さいごの日

6月17日

日本軍、八重瀬岳南方八百メートルの高地を奪回。大宜味岳で自兵隊、吉田司令、牛島中将を陣中に葬る。

第七師団の右翼は、前川の北方から我百原線へ戦線をはっていた。この戦線は、米軍の進撃方向に逆行してきっすぐ、約一・半の線をとる浦原の丘に向いていた。付近一帯の丘陵地帯をうもんだが、日本軍の新地帯がつくっているが、なにもわからなかった。

四月十九日午前七時三十分、「高しとされた地帯」に新かくんだ米軍は、日本軍の猛攻をうけそこにクギづけにされた。いっしょに進撃していた隊の中隊も、前川の突き出た岩山から日本軍の一斉猛射をうけ、進めなくなった。

米軍、進撃ならず

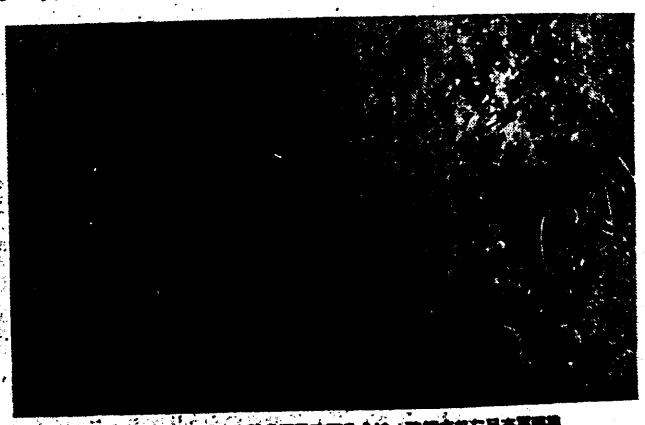
迷路で連絡、激しい抵抗

第九十六師団は、宜野湾村と宜野湾村我如古から浦添西原に相対する日本軍は、兵員がだいぶすくなくなった。独立歩兵第十四大隊（長・田村大佐＝右兵団第六十四旅団指揮下）独立歩兵第十二大隊（長・賀谷大佐＝右兵団第六十三旅団指揮下）であって、第一線部隊は大隊も配置され、約一千二百の兵力であった。

我如古の前面にいた米第三八二連隊第二大隊は、午前六時四十分、宜野湾村、前方にあるひくい地形を占領した。

第三八二連隊は、嘉のある岩山だ。ここからは小禄やまゆう岡で、日本軍が、はげしく米軍は大きくうけたので、米軍は大きな被害をうけた。二、三カ所で、敵の戦車は攻撃をうける心配はなくなった。あちこちで手りゅう弾戦が行なわれたが、この戦車は、どういう指令をしたのか、倒れざま日本軍の陣地に、砲撃をくわえた。米軍は、ようやくのことで、前進をはじめ、夕暮をかかえて飛びこんできた。

とう所あろうとも、ひっくり返



米軍の猛撃、砲撃、機銃の三重攻撃をうけ、破壊された日本軍陣地
—米軍写真班撮影合衆国提供

二連隊である。右翼の第一大隊がC中隊をだし、A中隊を右に「高地のある丘」にくるまでなんらの抵抗もうけなかった。

このあたりの地帯は石の岡原に、石灰の高がいっぱいあり、丘は高さ約二千M、長さ二・七キロ、付近で、ひとまわ目立っていた。

A、C両中隊が、この丘にに前進するやいなや、丘のうえの日本軍は、たちまち砲火をあびせかけた。C中隊は両翼とまゆう岡で前進をはばまれ、A中隊もまゆう岡でその場にクギづけにされた。米軍はこれにたいしてもうさまたげとはならず、両翼からも攻撃をうけるのに、敵は、やはりゆう岡で、敵は、見えないなかの日本軍の北西端の一部分であった。

山頂はどこも突撃することができず、宜野湾村は、日本軍のあるのであった。この「高地のある丘」は、ほぼ、さきほどの陣地があるとは思えない格好をしていた。日本軍は、地下に迷路のように、抗道をつくり、たがいに連絡がとれるようにし、両翼から攻撃できるようにつくられた、恐るべき要塞陣地だったのである。

夕暮れまで、激しい戦闘がつづいた。第二大隊が占領した地点は、いつまた日本軍に奪いかえされるかわからない丘の北西端を含めた地点と、西翼スロープの一部分であった。

くつつき、正午、A中隊は西翼スロープに攻撃を加え、夕暮まで攻めのぼったが、そこでは対峙に陥りるのだにもゆかず、かといって、とりまくこともできなかった。中隊長は頭上で日本軍の撃ち方で戦死し、戦車一台も四十七名が戦車内に撃たれ、かくされた。

訂正　山口県防衛部・宗本岡喜久夫氏長男三人・本岡敏子さん（札幌市・月巻）

七師団戦記

ああ沖縄

<77>

撤退せずば死

穴にこもり援軍待つ

戦没一万八千五柱の霊にささぐ

苦戦する米軍

米軍は、西原村の西原丘陵めざし、攻撃をはじめた。丘陵の前方にくは地がある。谷をひかえ、高地のある丘陵の西端から系数の谷の上流となっており、山の尾根が東西にせっていた。西原丘陵は数丘陵からみねつづきだ。そのあいだに、幅ひろい低地が横たわっており、ここのなかを路、五号道路（宜野湾―豊見城道）が走っていた。

牧港河口にそそぎこむ流れは、高地北端の丘にそなもとを発している。西原と系数丘陵の北側のふもとから、そのまま西方の海へ流れこんでいる。途中は、高地の前のように河床をなしていた。

宜野湾村では、米第三八一連隊の第三大隊が、同じ地点に三十五分も待機して、第一大隊のパタと倒れた。日が暮れるまで身動きできなかった。

米第三八一歩兵大隊は、我如古北方のその位置から、部落西方を通過して進撃したが、部落にさしかかったとき、我如古南部から日本軍の機関銃掃射をうけた。

左翼にいたC中隊は、ちょうど墓地のある丘の近くにいたため、機関銃で頭上からまともにねらい撃ちされた。中隊は、後方に引きさがろうとした。たちまち退却路で敵人の兵士がバタバタ倒れた。日が暮れるまで身動きできなかった。

宜野湾村では、米第三八一連隊の第三大隊が、同じ地点に三十五分も待機して、第一大隊のように弾雨をはり、両翼の丘から機関銃弾の乱射をあびた。もう一歩も進撃できなかった。

米第三八一歩兵大隊は、我如古北方のその位置から、部落西方を通過して進撃したが、部落にさしかかったとき、我如古南部から日本軍の機関銃掃射をうけた。

左翼にいたC中隊は、ちょうど墓地のある丘の近くにいたため、機関銃で頭上からまともにねらい撃ちされた。中隊は、後方に引きさがろうとした。たちまち退却路で敵人の兵士がバタバタ倒れた。日が暮れるまで身動きできなかった。

宜野湾村では、米第三八一連隊の第三大隊が、同じ地点に三十五分も待機して、第一大隊のように弾雨をはり、両翼の丘から機関銃弾の乱射をあびた。もう一歩も進撃できなかった。

K中隊がク水地にさしかかると、西原丘陵や森の中から、一斉に迫撃砲、機関銃、小銃の射撃をあびた。米軍は、これに応戦、一分隊をもって日本軍陣地をおそい、五人を殺し、機関銃一、迫撃砲二を奪破したが、そのすぐうえの陣地から日本軍のやっと生き残った米兵は、後退して山腹に穴を掘り、たてこもって援軍のくるのを待った。

K中隊は指揮官が二度も変わった。最初の中隊長は戦死、二人目は負傷した。右翼の方のL中隊では、三人の米兵が、西原丘陵の前を横切ろうとして、一人ずつ殺された。

丘陵西端からの日本軍の機関銃は、まともに米軍前面に当たり、系数丘陵からの弾丸は、道路を越え、米軍右翼を直撃した。系数では、穴の外に出れば、たちまち死か負傷だった。

ここで、米第九師団と米第二七師団歩兵連隊のC中隊長ムルラン中佐は、死と敗北の明、暗は、瞬間に進撃準備をすませていたのだった。

部隊との共同作戦が必要なことをさとった。彼は隣接部隊第二連隊からの系数進撃は、全然のそみがないことをさとり、進隊長M・E・ハロラン大佐の許可をえて兵を撤退し、後退させ、守備させることとなった。

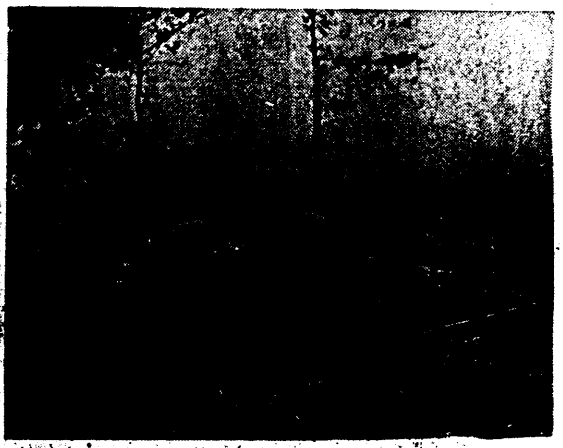
この撤退命令がまたはいまさらないまえ、大隊の戦車五台のうち二台が、さきに戦列をはなれて動きだされて敵人に殺された。戦車が系数と西原丘陵の間の平地にしかかったとき、第三大隊、午前八時、系数西方を通りにした。（沖縄戦・米軍の記録より）

沖縄戦で亡くなった人

6月18日

バックナー中将

高嶺村真栄平で戦死。



伊佐浜部落前を進む米兵＝米海軍基地司令部提供

十七師団が合流、系数と西原丘陵間にある盲腸、宜野湾街道にそって布陣した。米第三八一歩兵連隊第三大隊長D・A・ノーランが、ムルラン中佐のもつ戦車五台を用いて合同攻撃をしようと相談したが、まともに米軍前面に当たり、系数丘陵からの弾丸は、道路を横切った。

ノーラン大隊は、西原から飛びたんできた日本軍の爆撃機とあい、たちまち第二大隊と第三大隊のキャプテンが、ひとりでもがいたが、ムルラン中隊が撃破されたため、予備軍からL中隊が派遣された。この部隊の移動で日本軍の攻撃は、ますます激しくなり、西原丘陵前の平地では、中隊はさんざんな目にあり、そこから他の中隊の援護の射撃をして退却させることになった。

L中隊が援護射撃をしている間にも、日本軍のきゅう撃は落雷のように襲撃、兵数十人が生命を失ったとなり、戦死してしまった。この日、西原丘陵前に撤退していた第三八一連隊に帰ったが、日本軍の八一式野砲は、約三千二百人という。午後四時までに第三大隊の損害は八十五人の戦死傷者を出す大損害をうけた。

また、宜野湾村地域の攻撃を受け持った第二十七師団は、これも各地で苦戦の連続だった。牧港入江を渡ったまず、夜が明けるまでに、西原村の丘陵地帯に陣をかまえた第一〇六連隊の歩兵第一連隊につづいて、第三大隊は、午前八時、系数西方を通りにした。（沖縄戦・米軍の記録より）

題字　山岸国鶴令嬢、故宮田寅次郎氏夫人・本間哲さん

（札幌市・月寒）

七師団戦記

あゝ沖縄 <78>

戦没一万八千五柱の雲にささぐ

三日のいのち

山三四七四部隊の第三大隊をはなれ、師団本部直属となっていた第十一中隊（長・木口軍曹）は、四月二十八日、第一線の後方、帯地陣地へ出発することになった。この車輌隊は、いつも各中隊のうしろにおかれ、バッ

沖縄戦さまざまの図

6月19日

米歩兵第九十六師団イナスレー代将戦死、牛島中将、同参謀相に伝令の打電。島田司令、荒井憲兵部長戦死不明となる。ひめゆり部隊解散。摩文仁の六十二師団、独歩第十四の各部隊を中心とする残兵と、その北方約三キロの真栄平の二十四師団司令部は完全に分断される。午前八時、ひめゆり部隊四十人戦死。

たとしない存在だった。

すでに戦死者十数人をだし、二中隊の兵力は百七十人くらい。これに他部隊から配属になった機関銃隊が約六十人、二百三十人の銃は前進をつづけ、第一線陣地についた。

「あと三日…」

「あと三日のいのちだ」

兵隊同士、だれいうとなく、こんなことばがひろまった。あきらめに、決戦の意欲をまぜられた感情をこめて―

長嶺伍長（糸満市真栄平）も、胸のなかでつぶやき、実感をあじわってみた。捨て身の覚悟を決めるべく、と同時に、日本の生活感情、日本の精神風土を感じた。

日本人ではない、日本があった。

「あと三日…」

見なれている戦友たち―その顔が、どの顔も異邦人のように感じられる。切迫した、けわしい表情が刻まれていた。指揮班の上等兵が連絡にきた。「今夜八時、第十一中隊出発」という。

村上軍曹から、小銃の音をたてるな―と注意をうけ、第三中隊（長・川島中尉）の兵隊の道案内で前進した。川島中隊は、すでに、ほとんどの兵力を失い、木口中隊の前進と入れかわって、後退をはじめていた。

木口中隊は、くらやみのなかを前進した。途中にいる他部隊の兵からいろいろ注意をうけた。通信隊の前では「走れ」工兵隊の前では「伏せて進め」

一歩一歩、緊張して進む。川島中隊の負傷兵が、続々ざっくってくる。重傷者は、胸に、氏名と負傷個所を書いた荷札をきけ、あえぎあえぎ歩いてくる。重傷者は戸板にのせられ、うなりつづけてゆく。なかには、木口中隊から、川島中隊に転属になった戦友たちもいる。前進中の兵は、悲痛の感に胸をしめつけられた。

函館の出身で、電話交換手をしていたという第一等兵、木口隊から川島隊に転属になった彼だ。その広い胸のうえに、だれが置いたのか立花が一輪おいてある。

最前線での第一夜、しかも、生まれてはじめての、そして、こ

つかれた。

焦土にゆかしく

戦友の死体に花一輪

十一時ごろ、目的の陣地につく。あたり一面、草も木もなく、焼けただれている。いかに川島中隊が激戦したかーなまなましく実感が迫ってくる。

長兵上等兵は疲をおぼえて一息いれた。目の前に、申しわけていどに土をかけられた戦死体が四つ。

〈だれが、死んだんだろう〉

〈体格のいい戦死者の顔をのぞいた。

〈おう、俺か…〉

四つ見える。どうも、厚ぼったい。でかいやつが、ゆうゆうと歩いているんだ」

半信半疑でいる長兵上等兵の耳に、英語がひびいてきた。

〈兵隊の声？〉

ドーンと胸が鳴る。思わず銃を握りしめたとたん、すぐそばから小銃の発射音。

「ウワーッ」

敵兵の絶叫。車ったのは小田正三上等兵（金武）一人が倒れ三人が、あわただしく消え出す。その直後が兵、長兵、武野、小南の三人が、小銃を乱ちゃくる。命中はしなかった。

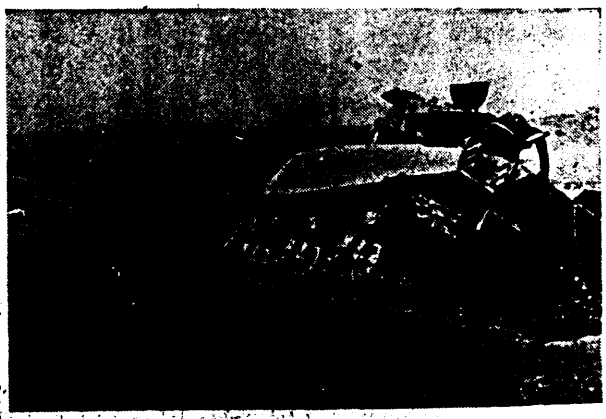
倒れた敵兵のそばへより、身体検査をした。思ったた。その敵兵は、なんの武装もしていなかった。

「おっと、戦死者をさがしに来て、逆に、敵兵に見つかったんだろう」

武野上等兵の推定。それに答えて小南上等兵―

〈長兵、前方の陣地に、人影が〉

「ここは、ずいぶんの敵兵で、



中地区で撮影された米軍車輌球形司令部提供

〈この焼け野原のどこからさがしてきたのだろう…〉

眼一等兵の戦死と、ここに花をささげたのも知らぬ人のゆかしい心とに、長兵上等兵は胸を

〈長兵、前方の陣地に、人影が〉

「長兵、前方の陣地に、人影が〉

〈長兵、前方の陣地に、人影が〉

れない夜だ。武野上等兵が銃を

にぎりしめて近づいてきた。敵

命中はしなかった。

弾が、ちょっ

武野上等兵の推定。それに答

えて小南上等兵―

〈長兵、前方の陣地に、人影が〉

「ここは、ずいぶんの敵兵で、

日本軍を全滅させ、米軍の占領軍になっているとでも思ったんだろう」

真相は、二つの推定のうちにあるだろう―長兵上等兵は、そう思った。

ところが、この射撃が、日本軍がここにいることを、敵に知らせることになった。間もなく、敵陣地から砲撃がはじまった。眼鏡二等兵（沖縄出身）が戦死するころ、夜がほのぼのと明けてきた。

付近には谷、丘、沢があり、約百二十対前方、友軍陣地を見渡せる位置に陣地があった。

午前四時二十分ごろ（二十九日）木口中隊長代、戦闘開始のラッパを平野上等兵（宮崎）に吹かせた。前線をついて、ラッパの音が高らかに鳴りわたる。そのラッパを、おわりまで吹かないうちに、平野上等兵に迫撃砲の破片が命中、重傷をうけて倒れた。

木口隊長の命令の持ち主だったのに…よく、みんなにいいソドを聞かせてくれたのに…〉

編集　山口部司令部・宮本関東大隊長天王入・本間恭子きん

（札幌市・月寒）

七師団戦記

あゝ沖縄

戦没一万八千五百柱の霊にささぐ

<79>

さながら鬼のよう

米兵に武者ぶりつく

太口中隊は、前方からは迫撃砲弾、後方から艦砲弾やあび、地雷さながら。あたりには戦死体が散乱し、生きている者も、魂のような顔で戦闘をつづけている。水さかずきのように、みんなでまわしこの水をのみ、それぞれ配置についた。

白兵戦

第一小隊第二分隊（兵・高橋戦闘伍長＝函館の前方六十対付近に、米兵が二十人ほどあらわれた。太口中隊に気づいていない。ゆっくり背のうをおろす仮寝をねらい、一せい射撃をあびせた。八人が倒れ、逃げて行く。

やがて、銃撃とともに反撃してきた米軍は、太口中隊のなかへ乱入、たがいに、銃をふりまわし、手りゅう弾をなげ、つかみかかり、血みどろの白兵戦があちこちではじまった。加藤一等兵（北海道）は上半身に重傷を負った。水さかずきのように、みんなでまわしこの水をのみ、それぞれ配置についた。

負傷者は手当ても

せずにタコツボのなかに入れる。銃も手りゅう弾も、帯剣もとりあげる。自決をふせぐためだ。

「殺してくれッ…殺せッ！」

泣きながら重傷者が絶叫しつづける。戦友の感慨を考え、そして、傷の痛みにたえかねて。この日、絶命するまで戦いつづけた星上等兵、加藤一等兵はじめ、約四十人が戦死。米軍も大きな損害をうけて後退していった。

太口中隊では、暗くなるのを待ち、負傷者を中隊本部までさげることになった。前線から本部まで百五十対くらいなって

沖縄戦士たちの面

6月20日

後任としてスチルウエル司令官任命。

バックナー中将の

も、迫撃砲弾はたえまなくサクさせ、負傷者を

戦記から

戦没者一覧

戦死者は、昭和十五年徴兵検査の者で、函館連隊区出身で連隊内の生存者は五十人ぐらい。この部隊の名簿、編成を正確なものにしたいので、連絡してほしいーと、いっている。

連絡先　山本団司令部、故本間

米軍が上陸前に撮影した空中写真。（地図作成の資料）＝米陸軍琉球司令部提供＝

戦死者一覧

一既、二既、三既…力尻、次四）は、昭和十五年徴兵検査の者で、函館連隊区出身で連隊内の生存者は五十人ぐらい。この部隊の名簿、編成を正確なものにしたいので、連絡してほしいーと、いっている。

連絡先　山本団司令部、故本間

戦死者一覧から

陸軍上等兵（小樽）辻本文見　多々羅上等兵（小樽）福島貞雄一等兵（函館）吉林一等兵（北海道）和久井者一上等兵（北海道）

札幌市　山田

松太郎さんは、函館市の松田一郎、工藤実、岩崎金平、信田松夫、小樽の長井与次郎以上五氏の連絡を待っております。なお歩兵第二十二連隊（山三四七

七師団戦記

あゝ沖縄

<80>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

決自上等兵自決

長浜上等兵は、負傷と疲労で全然ねむれず、夜があけた。四月三十日米軍の砲撃がはじまる。きのうにまして激しい。

第二小隊長武藤少尉（函館）が村上軍曹（小樽）をつれ、各分隊を巡察して

沖縄戦亡きよの日

6月21日

午前十時三十分ニミッツ元帥は、沖縄における日本軍の抵抗は中止したと発表。午前一時、日本軍は残存兵力と学徒隊によって最後の総攻撃を敢行。

無残、血まみれ

〝生きていたかったろうに〟

いる。

「なにか食べたか？」

たずねられた長浜上等兵は、元気よく答えた。

「はい、カンメンポウ（カンパン）を一袋たべました」

そして、つけくわえて

「あと、二食分しかありません」

村上軍曹のけわしい顔に、かすかに笑いがうかんだ。

「長浜、お前まだ生きているつもりか？」

意外そうなその声に、みんなも笑った。軍曹は、寂しそうなえがおで、みんなを見回した。

長浜上等兵はむきになった。

「班長殿、米のめしをくわず

午前十一時ごろ、戦闘中の長

にこのまま死ぬんですか？」

村上軍曹の顔から寂しさが消え、食糧補給を約束した。それから電話をひきしめ

「今夜あたり、敵戦車がやってくるかもしれないから、みんなそのつもりで準備しくれ」

一同にいい渡して立ち去って行った。小学校教員だったという酒瓶小隊長は、軍刀を肩にかついで背負い、片手に弾薬を握っている。活発にカッ、カッ、カッ…と歩くうしろ姿が頼もしい。

（むかしの若武者みたいだなあ…）

長浜上等兵は、その姿にたのもしさを感じた。この小隊長も村上軍曹も、兵にとっては思いやりのある、やさしい上官だった。

浜上等兵のところへ、フラフラしながら平館吉栄一等兵（渡島支庁管内）がやってきた。負傷してタコツボへ入れておいたのに、真っさおな顔で、いまにも倒れそう。

「どうしたんだ？」

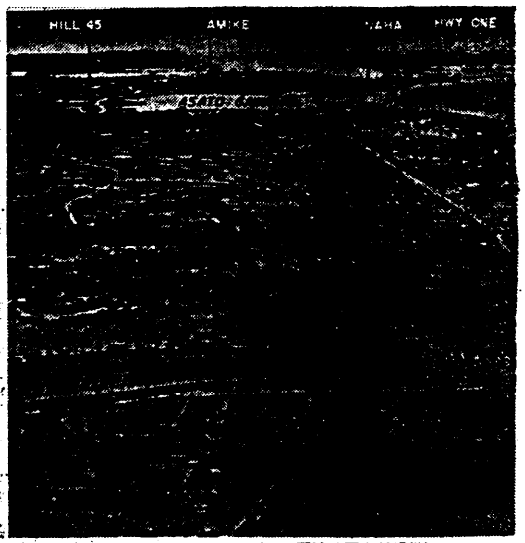
「半田（国一）上等兵殿（函館）が、自決するから、出て行けと追い出すのであります」

二人は同じタコツボにはいっていた。長浜上等兵は不吉なものを感じ、タコツボへ走った。

半田は、穴の中でうつぶせになって死んでいた。手りゅう弾自決。血まみれの遺体が無残だ。

函館の留守宅に、妻と三人の子供を残して召集した半田。

（生きて、帰りたかったろう。…）



米軍の沖縄島空中写真（米陸軍琉球司令部提供）

違いない。たがこの激戦だ。自分のようなものが生きていては戦友たちの迷惑になると考え、どうにもならぬ気持ちで、自決

「上等兵殿…平館がお世話するというのに、なぜ聞いてくれなかったんですか…」

長浜上等兵は、平館一等兵の

いそうなことをした）

そう思った。

（半田は、生きていたかったに

涙が流れた。平館一等兵も泣きだした。

×× ××

米軍は、木口中隊の三倍以上の兵力を交代させながら、肉薄攻撃を繰り返す。木口中隊は休む暇がない。長浜上等兵のところから二十メートルくらい離れ、血

長浜上等兵が、振り向くと、敵の手りゅう弾が、重機分隊でサク裂、二、三人が倒れるのが見えた。負傷した兵は、手りゅう弾を投げながら後退してゆく。敵我の手りゅう弾戦となった。

協賛　山長商事・旅人商事
寄贈　矢吹長表工人、本間勘子さん（秋田市・月寄）

七師団戦記

あゝ沖縄

<81>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

吉岡伍長の涙

米兵の肉薄攻撃をうけた高橋隊第分隊（長・三浦伍長）は残った四人のうち、二人は米兵に小銃でおう（殴）殺され、やっと二人が長浜上等兵らのところへ逃げ帰ってきた。

高橋陣地では、三浦分隊長がひとり、激しい敵弾をあびながら、陣地内を狂ったように駆けまわっている。部下は戦死し、高橋はうばわれ、みずからも高熱を負った三浦伍長は、失った部下さがしているのか、それとも高橋さがしているのか、見ていられないあわれなかぎりだ。しかし、逃れもどし行きたくとも手りゅう弾で戦っている長浜上等兵たちには行くに行けない。じっとしてはいられない、いらだちのまま、手りゅう弾をさかんに投げつづけた。

二人の高橋兵は、長浜上等兵をへつめたいやつだ…と思ったのだろう、援護射撃をあきらめ二人きりで出かけていった。

かなり時間がたった。二人が出発して二、三時間後、たにも

山となる戦死体

かたづける気力もない

間もなく、ほかの小隊が救援に来た。米軍は後退して行った。自兵戦は終わった。

暗くなってから、逃げてきた二人の高橋兵が、どうしても義援隊員をとりもどしに行きたいから、援護射撃をしてほしいーと、長浜上等兵らのところへたのみにきた。

人間のあのすさまじい敵の射撃を思うと、二人を死地へ出してやるようなものだ。

長浜上等兵は、決心をつけかね、立ちあがれなかった。

持ちだすに、やっと二人が戻ってきた。一人は、陣地へつく同時に絶命、一人は重傷で、ひどい苦しみよう。見かねた高橋小隊長が、暗い表情で見守っていたが沈んだ声で一言

「なんとかしてやれ」

といった。吉岡常治伍長（小樽）が、ふるえる右手に軍刀をにぎり、左手でしっかりおさえた。両眼に、涙がキラキラ光っていた。発射音がひびき、苦しみの声が消えた。

××

日）からつづいている激戦につかれはて、話しあう者もいなかきに死んで行った戦友が、うらやましい。一刻も早く、この死闘からのがれたい―そんな気持ちでいっぱい。

戦死体は山になっている。だれも、かたづける気力がない。戦死体のうえに腰をかけ、タバコをふかす者もいる。死はもう、特別なものではなくなっていた。高橋小隊長が命令し、吉岡伍長が立ちあがれなかった。

××

清田見習士官（北海道）がすっぱりうちしおれてやってきた。夜の所属する第三小隊に隊長以下全滅し、生存者はわずか三人だけだ―という。

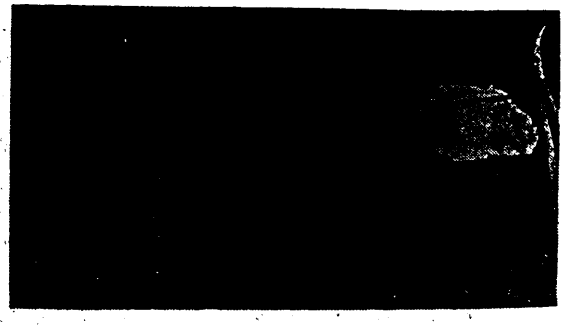
まるで、あの世から戻ってきた人のように、生きているのが、悪い―といった様子だった。

長浜上等兵の所属する第二小隊第四分隊も、この日、岡田春吉一等兵（滋賀）、内野雄一等兵（鹿島改庁）が戦死し、残員は四人。それも、きのう（二十九日）

死なせたのも、死があまりにも身近にあるからだ。これと同じケースがあちこちでみられた。

すでに本日中戦の生存残者は全体の半数にみたず、この日、

（鹿島）中村重三郎上等兵（木古内）豊島勝上等兵（北海道）藤辺久美雄上等兵（函館）松山勝一等兵（武田）磯口松雄上等兵（江差）村石上等兵（室蘭）三浦徳上等兵（北海



高橋高地の日本軍トーチカ内部。入り口はふさがれ、一尺ぐらいしかあいていなかった

三十日から、工兵隊や他部隊から

の支援をうけるようになった。

三十日の負傷者本部出身者の

みー中山栄一（長崎）清田常

寿久夫（室蘭）佐久八・本部付十名

（函館）内野上等兵

沖縄戦史ものがたり

6月22日

午前四時半、牛島軍司令官、長参謀長は摩文仁八重瀬岳に対して自決